

研究力強化の本質

KURAの活動紹介

KURA

CONTENTS

学術研究支援室について

P.02 MESSAGE

京都大学総長 山極壽一

京都大学学術研究支援室室長 佐治英郎

活動実績

P.06 業務の全体像

P.08 数字で見るKURA

プログラム紹介

P.14 URA 制度整備 (A メニュー)

P.19 URAの活動 (B メニュー)

MESSAGE

学術研究支援室について

— 京都大学の「卓越した知の創造」を支える —

京都大学は1897年の創立以来、「自重自敬」の精神に基づき自由な学風を育み、創造的な学問の世界を切り拓いてきました。これまでに9人のノーベル賞受賞者、2人のフィールズ賞受賞者ら、世界を代表する先導的な研究者を輩出し、西田哲学、霊長類学など世界に類のない新しい発想や学問を生み出しています。これらの伝統を継承しつつ、最先端の研究推進を通じて学生や研究者の能力を高め、それぞれを活躍の場へと送り出すことを目標とするWINDOW構想の実現には、研究者らが国や分野を越えて異なる能力や発想に出会い、協力関係を形作る場を提供していくことが重要です。

そのため本学では、平成24年度より、研究担当理事直下に学術研究支援室（KURA）を設置し、大学の改革、研究力強化、国際化等を戦略的に支援・推進するリサーチ・アドミニストレーター（URA）を配置しています。現在KURAは、本学の機能強化や部局等の学内組織間連携、国際化、研究環境改善などを支援・推進するとともに、本学の強みを生かした学際融合研究シーズの育成、大学の国際的なプレゼンスの向上などに資する多様なプログラムを運営しており、WINDOW構想に基づく大学改革を推進するために不可欠な組織として定着しつつあります。今後もさらにこの研究支援体制を充実し、日本におけるリサーチ・アドミニストレーション組織のモデルとなるよう努めてまいりますので、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

京都大学
総長 山極壽一



学術研究支援室は平成 28 年 4 月新体制でスタートしました。

学術研究支援室は、平成 23 年度の文部科学省「リサーチ・アドミニストレーター（URA）を育成・確保するシステム整備」事業の補助を受け、8 人の URA で発足しました。その後、平成 25 年度の「研究大学強化促進事業」により増員し、平成 26 年度には当初の 3 倍の室員数を擁する組織となりました。この拡充により、外部資金獲得支援業務に加えて研究活動の国際化、研究情報基盤の整備、産官学連携業務の支援、異分野融合研究の推進など、京都大学の研究力強化に繋がる様々な支援活動を、全学の研究支援組織や事務組織と協力して実施してきました。

一方、平成 26 年度には学内各部局の研究支援を目的として 8 地区に部局 URA 組織が設置され、教員および研究者と「顔が見える」関係を作りながら、当該部局所属の地区を主な活動の場として、さまざまな支援活動を展開してきました。

これら二つの URA 組織、学術研究支援室と部局 URA 組織は、役割や活動内容がやや異なるものの、京都大学の研究力強化という共通の目標のもとに京都大学 URA ネットワークを形成し、協力し合いながら活動してきましたが、より質の高い充実した研究支援を実施するため、平成 28 年 4 月に二つの URA 組織を一体化して新しい体制の学術研究支援室を発足させ、学術研究支援棟に研究支援業務のプロフェッショナル約 40 人が一同に集結しました。

京都大学は、地球社会の調和ある共存に貢献すべく、世界を先導する質の高い先端的学術研究を推進して、多様な研究の発展と、その成果を世界共通の資産として社会に還元する責務を果たし、国際的にも高い評価を受けてきています。新しい学術研究支援室は、こうした京都大学の「卓越した知の創造活動」をより強力に支えるべく、大きくなった組織のスケールメリットを活かして、柔軟かつ活発な連携を促進し、専門性を考慮した適切な人材を配置して、多様な支援要請へ対応できる組織となるように力を尽くします。また、研究環境の整備ならびに研究推進支援活動の質向上のために、独自のユニークな研究支援企画の開発やその実施にも積極的に取組んでいきます。さらに、支援サービスのご案内や活動成果につきましては、本ウェブサイト等で積極的に情報発信していきます。今後とも、学術研究支援室の活動にご理解とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

学術研究支援室
室長 佐治英郎



京大式

研究力強化の本質

KURAの活動紹介

活動実績

業務の全体像

数字で見るKURA

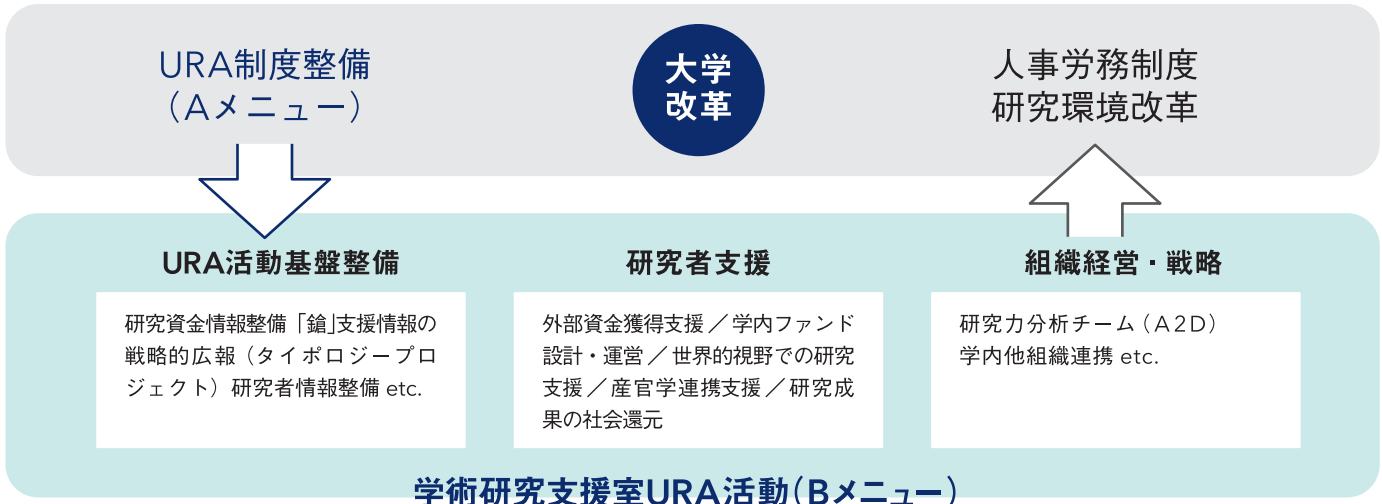
業務の全体像

京都大学におけるURA業務の全体像

京都大学第2-3期中期計画・中期目標 -WINDOW構想-

重点戦略2-1「国際共同研究の推進」重点戦略2-2「研究支援体制の充実」重点戦略2-3「情報発信強化」重点戦略4-3「IR機能強化」

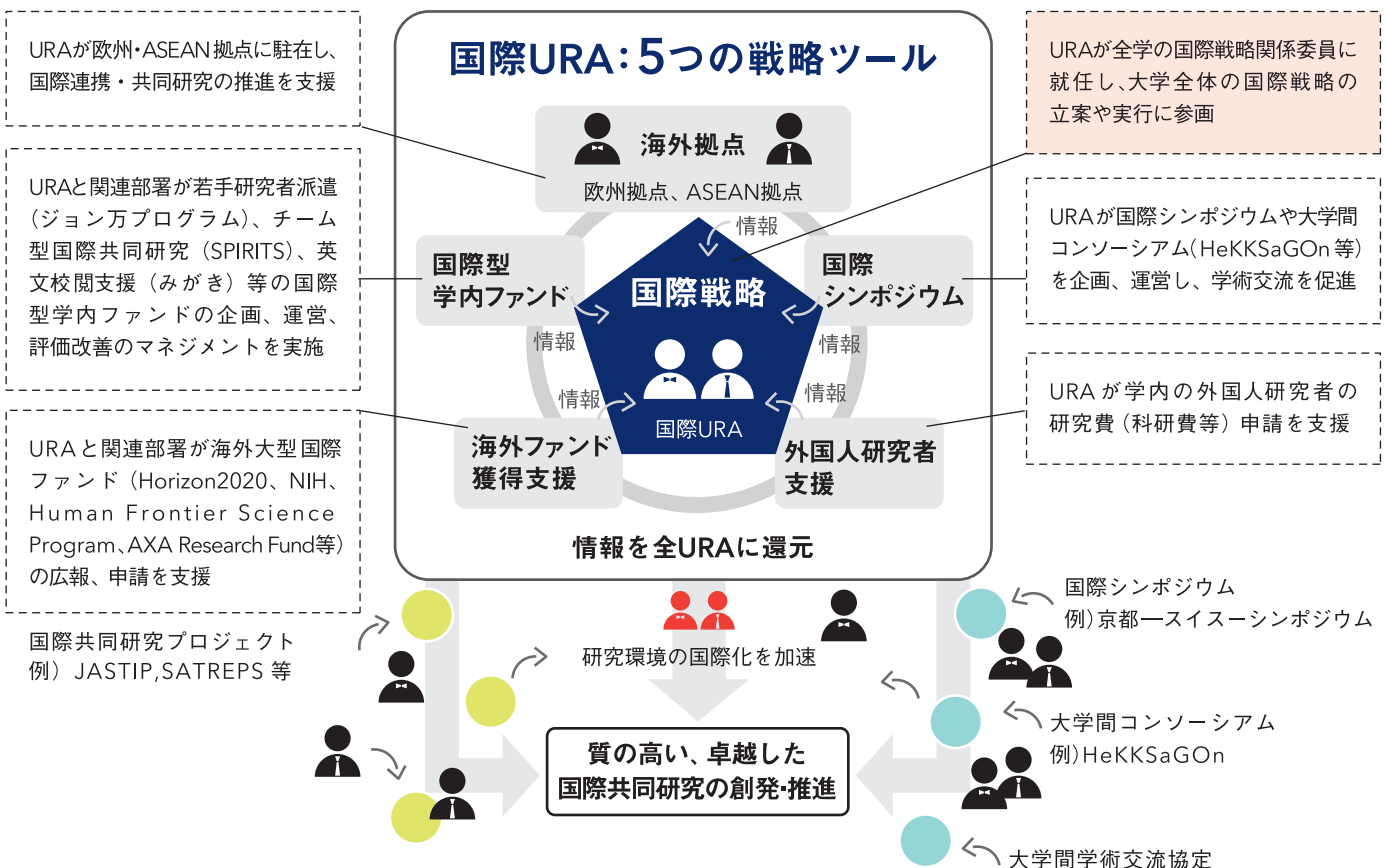
京都大学の改革と将来構想を推進する重要な役割を担う組織として、新たなURA職の制度を構築し、研究力強化に向けた活動・改革を加速する



京都大学における特徴的な3つのURA業務

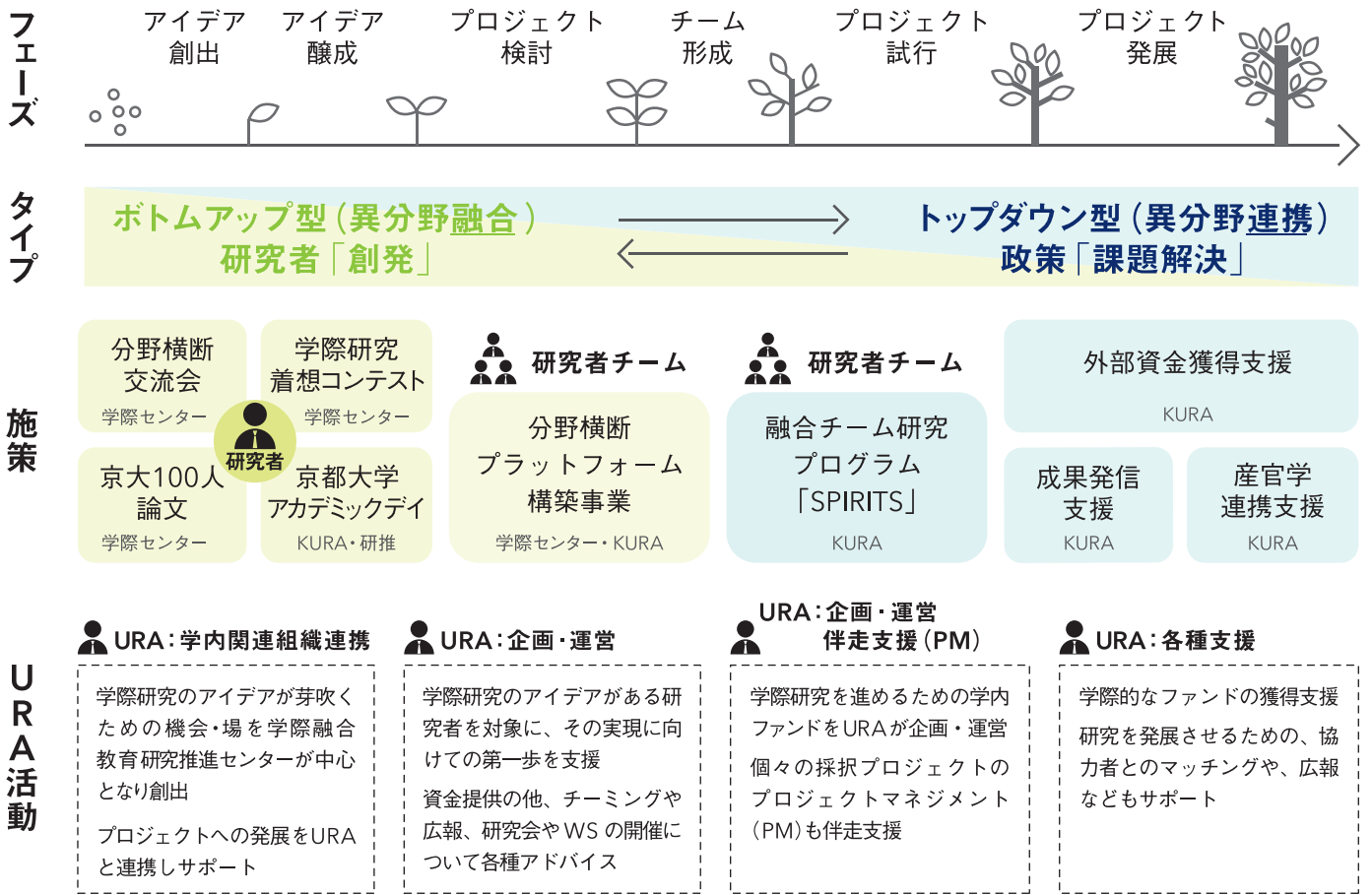
1 「国際化」 - 地域・分化を越境する -

京都大学は「海外研究活動の充実」「海外研究者の受入体制の強化」「国際共同研究の推進」「世界の研究大学との交流」を促進



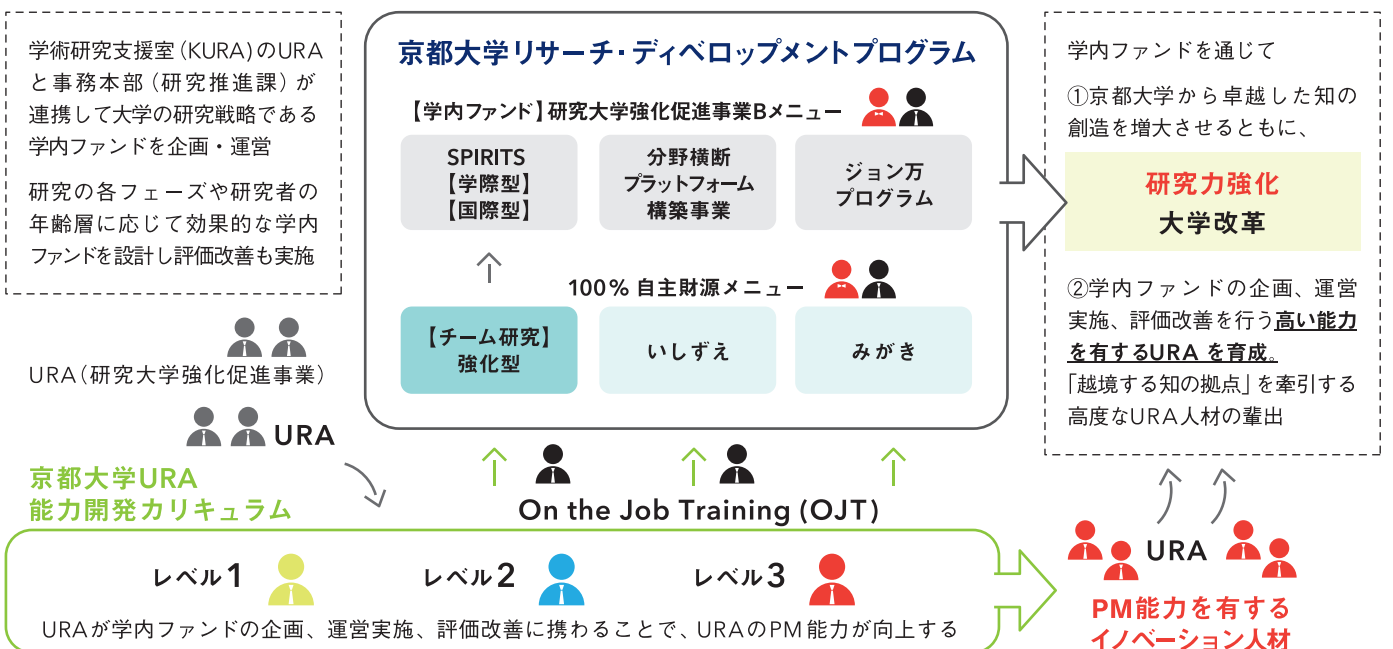
2 「学際研究推進」 - 学問領域を越境する -

京都大学は、学際研究が芽吹くための土壌作りから大型プロジェクトへと発展するための伴走支援までを戦略的にサポート



3 「リサーチ・ディベロップメントプログラム (RDP)」 - 学内ファンドの設計・運営 -

京都大学は「越境する知の拠点」をめざし、独自の学内ファンドを設計。学内ファンドの設計・運営を通じてPM能力を有するURAも育成



数字で見るKURA

KURA URA活動(Bメニュー)【機会提供支援】H25年度～(継続中)

国際



国際シンポジウム

→ 数字で見る「国際シンポジウム」

ブリストル大学 (平成25年度:133人【71人】)

UCSD (平成26年度:64人【42人】)

ブリストル大学・ハイデルベルク大学 (平成27年度:52人【16人】)

UCSD (平成27年度:74人【27人】)

スウェーデン4大学 (平成26年度:102人【47人】)

UCL (平成27年度:26人【21人】)

開催数 **12回** 開催セッション数 **124セッション** 参加研究者数 **1,202人**

スイス3大学 (平成25年度:203人【91人】)

国立台湾大学 (平成25年度:133人【60人】)

チューリヒ大学 (平成28年度:53人【33人】)

国立台湾大学 (平成26年度:227人【118人】)

ボルドー大学 (平成26年度:117人【47人】)

ボルドー大学 (平成27年度:74人【42人】)

【】内は本学からの参加研究者数
数値は平成25年度～平成28年度支援延べ数
2017.5.1

KURA URA活動(Bメニュー)【技術提供支援】H25年度～(継続中)



CREST・さきがけ獲得支援

→ 数字で見る「CREST・さきがけ獲得支援」

支援数 **112件**
 模擬ヒアリング実施件数 **22件**
 情報提供満足率 **88%** (N=64)
 申請書レビュー満足率 **79%** (N=62)
 模擬ヒアリング満足率 **96%** (N=16)

支援を受けた研究者の声

<情報提供に関して>

- ・科学研究費申請との違いについての資料や公募説明会の様子のレポートは大変参考になった。
- ・要綱では読み取れない、領域の求める課題についての情報を教えて頂いたことは大変役に立った。

<申請書レビューに関して>

- ・戦略目標や領域内で重要視している点を十分に把握し、申請書作成において適切なアドバイスがあった。
- ・多角的な視野や、大学内外の動向等、期待していた以上の情報提供があった。
また、単に文章を直すだけでなく、様々な提案を頂いた。

<模擬ヒアリングに関して>

- ・スライド作製のポイント、雰囲気や面接の順序(進み方)、どんな点に領域アドバイザーたちが食いつかれるか、など実際の具体的な情報が手にはいった。
また、領域アドバイザーのご専門などに関する詳細な情報も手に入り、結果として非常に対策をしやすかった。



数値は平成25年度～平成27年度支援延べ数
2016.11.29

KURA URA活動 (Bメニュー) 【資金提供支援】 H25年度～ (継続中)

国際 学際 人際



融合チーム研究プログラムSPIRITS

→ 数字で見る 「融合チーム研究プログラムSPIRITS」

採択数 **86**件

学際型 **21**件

国際型 **65**件

トップダウン型 **3**件

URA伴走型
支援実施件数

29件

外部資金獲得

75件

1,000万円以上
大型競争的資金獲得件数

13件



研究会ワークショップ
開催数

118件

国内 **38**件

国際 **80**件

採択プロジェクトへの海外からの参加メンバー数

64カ国 **531**人

数値は平成25年度～平成26年度支援延べ数
2016.11.29

KURA URA活動 (Bメニュー) 【資金提供支援】 H25年度～ (継続中)

国際 学際



いしずえ

→ 数字で見る 「いしずえ」

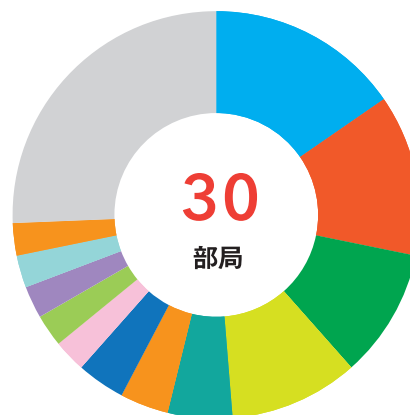
支援申請数 **249**件

支援数 **83**件

獲得外部資金例

- ・ AMED **1**件
- ・ SATREPS **1**件
- ・ JST戦略的イノベーション創造プログラム(SIP) **1**件
- ・ JST戦略的創造研究推進事業 **1**件
- ・ 科学研究費新学術領域 (研究領域提案型) **2**件
- ・ 科学研究費基盤研究A **3**件
- ・ 科学研究費基盤研究B **5**件
- ・ 科学研究費若手研究A **1**件
- ・ 科学研究費若手研究B **3**件
- ・ 科学研究費他種目 **多数**
- ・ 財団・基金系外部資金 **多数**

支援研究者所属部局



- 工学研究科
- 医学研究科
- 農学研究科
- 理学研究科
- 生存圏研究所
- 防災研究所
- 霊長類研究所
- 化学研究所
- 原子炉実験所
- 人間・環境学研究科
- 生態学研究センター

数値は平成25年度～平成27年度支援延べ数
2017.5.1

— KURA — URA活動(Aメニュー) 組織経営 H26年度～(継続中)

URA育成カリキュラム

→ 数字で見る「URA育成カリキュラム(レベル1)」



科目数 **14**件



講義時間 **16**時間

科目

- ・ URA業務
- ・ 政策・競争的資金制度
- ・ インタビュー
- ・ 研究プロジェクト
- ・ 研究費
- ・ 広報・アウトリーチ
- ・ 研究倫理・コンプライアンス
- ・ 特許と大学の知的財産活動
- ・ 産官学連携
- ・ 情報探索基礎
- ・ 契約
- ・ 申請書の書き方
- ・ ヒアリング審査対策
- ・ 演習

テキストページ数 **420**ページ

講師数 **11**人

URA講師数 **6**人

修了者数 **55**人

(平成25年度～平成28年度延べ数)

2017.5.1

— KURA — URA活動(Bメニュー)【資金提供支援】 H26年度～(継続中)

国際

みがき：英語論文校閲支援制度

→ 数字で見る「みがき」



支援申請数 **178**件



支援数 **126**件



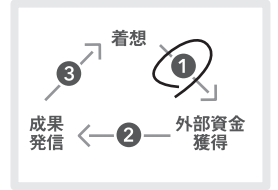
- ・ 英文校正は自らの財源では手を付けにくい部分でもあり、今回活用させていただき、大変有意義でした。
- ・ 若手にとって早めに英文校閲を受ける機会を得る事は、今後の研究にとって非常に有意義だと考えます。
- ・ 研究費の少ない助教には大変有難い事業であると感謝しております。論文投稿のモチベーションアップにつながりました。
- ・ 本事業のような英文校正費の支援は今後も拡大して頂けると幸いです。
- ・ 採択率などを公開することで応募が促進され、また、予算もそれに従って適切なものに増減できるとおもう。採択率が上がれば、それだけ京大発の「良い論文」が増える。

数値は平成26年度～平成28年度支援延べ数

2017.5.1

科研費申請支援タスクフォース

→ 数字で見る「科研費申請支援タスクフォース」



支援率(*) **20%**



科研費説明
会開催回数 **12回**

支援上位種目 新学術、若手A、特別推進、若手B、基盤B、海外、基盤S

分野別支援率(*)

総合系	24%
人文・社会科学系	33%
理工系	17%
生物系	19%

研究者アンケートから

対応のスピード	早かった 75%	普通 21%
内容へのアドバイス	参考になった 96%	参考にならなかった 4%
総合的にみて	参考になった 97%	参考にならなかった 3%

外国人研究者申請支援率(*)

31%

(*)… 本学申請数に対する、申請支援率を表す。
数値は平成27年度のもの
2017.5.1

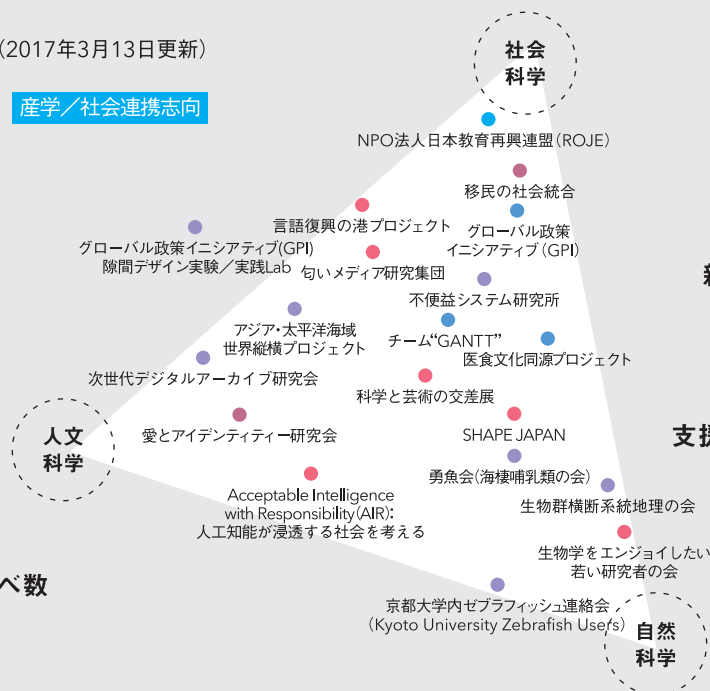
分野横断プラットフォーム構築事業

→ 数字で見る「分野横断プラットフォーム構築事業」



分野横断グループ分布図 (2017年3月13日更新)

学術志向 < ●●●●● > 産学/社会連携志向



新規学際企画支援数

約**15件** / 年

新規学際企画参加研究者数

約**500人** / 年

支援に携わったURAのべ人数

25人

新しい学際研究チームのべ数

40

京大式

研究力強化の本質

KURAの活動紹介

プログラム紹介

A URA制度整備 (Aメニュー)

B URAの活動 (Bメニュー)

京都大学におけるURA体制の構築

組織経営

京都大学は平成25年度に国内の大学/研究機関で初めて部局URAを設置し、40名規模のURA体制を構築
平成27年度には、京都大学のURA活動を鑑みた体制の見直しを行い、**より効果的・効率的に活動できるURA体制の再構築（一元化）**を行った

旧体制：部局URA設置 H25-27年度

課題

KURAと部局URAは別組織、オフィスも離れている

- URA間の情報共有が困難、部局組織横断的な連携が非効率
- URA配置が固定しているため、多様な支援ニーズに各部局だけでは対応できない
- 多彩な能力と経験を持つ URAのスキルを活かしきれない
- 一体的なURA育成が難しい

見直し・検討 H27年度

対応

- 総長のリーダーシップの下、新組織体制実現に向けた構想策定
- 研究担当理事補をリーダーとする検討WG設置
- 各部局へのURA活動状況、要望等のヒアリングを実施
- URA再配置・処遇の見直し実施

現体制：一元化（サテライト化）H28年度～

- ① 京都大学のURA全員がKURA所属に ※部局URA組織の機能は、8つの「地区担当URAチーム」に継承。各地区に窓口設置
- ② KURAの全URAが活動できる新オフィスを設置 ※遠隔キャンパスの一部にはサテライトオフィスを設置してURAが駐在

効果

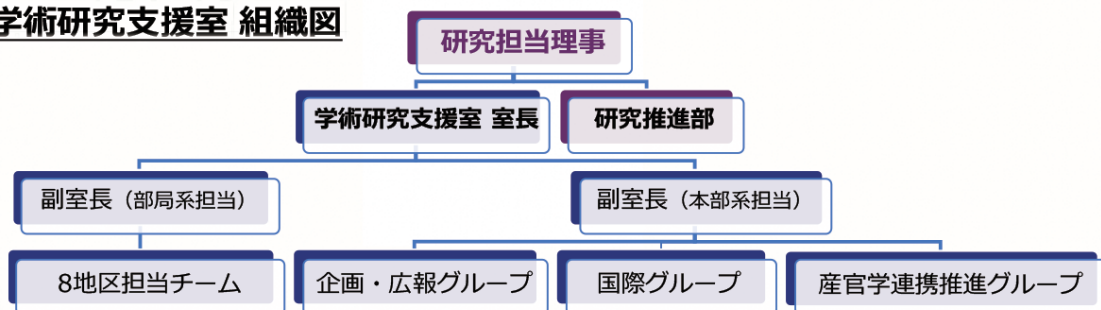
一元化によりスケールメリットを最大限に活用

- **URA間の連携が深化**：一体感のある新オフィスで情報共有が円滑に、柔軟な人員配置で効率が飛躍的向上
実績例) 企業-研究者マッチング迅速化、科研費申請書作成支援の対応可能件数が前年度の3倍に
- **専門性とスキルを活かした組織横断的な取組が加速**：
実績例) 全学的な人社系の研究支援体制を構築、外国人研究者支援の一元化
- **好事例の速やかな共有**：
実績例) 企業と研究者を迅速につなぐために一部局で開発した研究者データベースを全学レベルに拡大
- **URA育成**：同一組織となり、ジョブローテーションが実現。同一カリキュラムの提供で、業務水準が向上
実績例) 平成28年4月時に5人のURAを本部と地区間で配置転換
- **大学の経営マネジメント強化**：部局現況の迅速かつ定常的な把握が容易となり、全学を俯瞰する分析力が向上。分析情報を役員へ提供することなどにより、部局の現状を踏まえた学内改革に向けた学内施策立案に対する貢献拡大
実績例) 学内の部局を対象とした研究活動指標の分析及び達成度に応じた戦略的な予算配分手法の導入



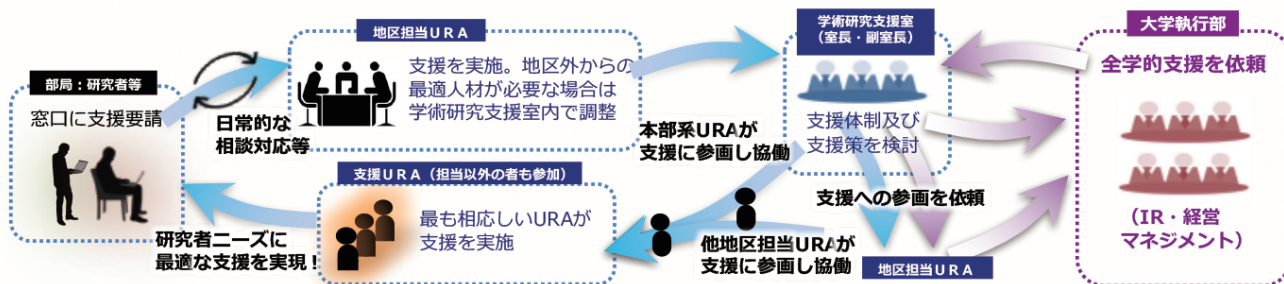
20170501

H29体制：学術研究支援室 組織図



支援の流れ

「大学執行部」「各部局」「個々の研究者」が必要とする活動への機動的かつ柔軟な対応が可能に



京都大学の改革と将来構想を推進する重要な役割を担う組織としてさらに強化

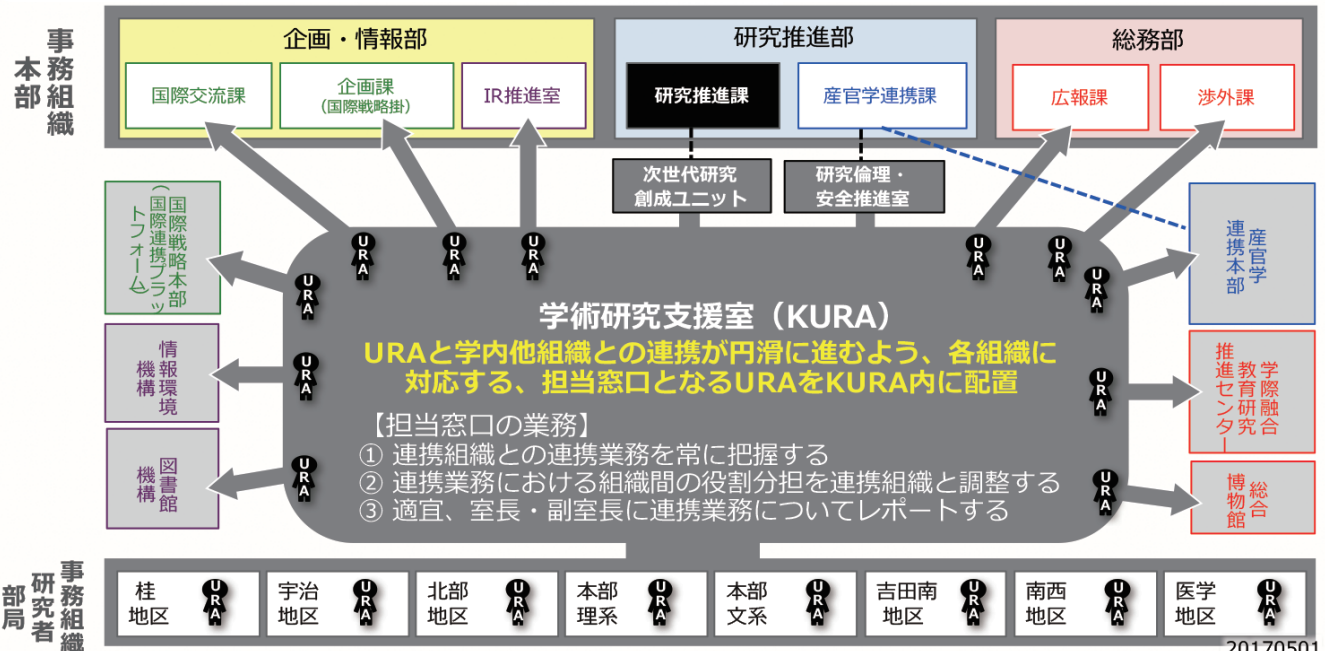
20170501

A URA制度整備 (Aメニュー)

URAと学内組織との連携

組織経営

京都大学には従来より多くの研究支援組織がある。しかし、組織間の連携は必ずしも十分でなかった。そこで、**学術研究支援室が全学研究支援組織のハブとしての機能**を果たすことで、より効率的・効果的な研究支援・研究環境整備を可能とした



京都大学におけるURA人材の雇用

組織経営

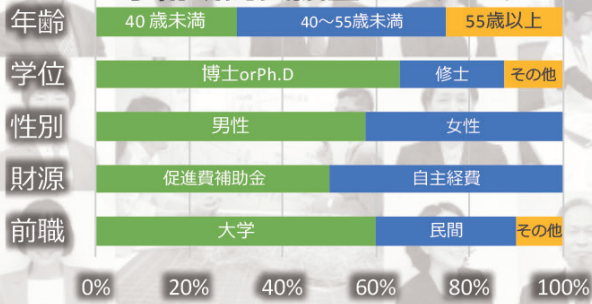
約4000人の多彩な京都大学の研究者、および大学執行部からの多様なニーズに応えるためには、**多様なスキル・知識・経験を有するURAが必要**である。そのため、京都大学では、**多数のURAを配置するための財源※を確保し、戦略的な公募活動**を行っている

※本補助金雇用20名、自主経費雇用20名 (H29.4.1現在)

【学術研究支援室URAの 専門学術分野】

情報学基礎 計算基礎 人間情報学 情報学フロンティア 環境解析学 環境保全学 環境創成学 デザイン学 生活科学 科学教育・教育工学 科学社会学・科学技術史 文化財科学・博物館学 地理学 社会・安全システム科学 人間医工学 健康・スポーツ科学 子ども学 生体分子科学 脳科学 地域研究 ジェンダー 観光学 哲学 芸術学 文学 言語学 史学 人文地理学 文化人類学 法学 政治学 経済学 経営学 社会学 心理学 教育学 ナノ・マイクロ科学 応用物理学 量子ビーム科学 計算科学 数学 天文学 物理学 地球惑星科学 プラズマ科学 基礎化学 複合化学 材料化学 機械工学 電気電子工学 土木工学 建築学 材料工学 プロセス・化学工学 総合工学 神経科学 実験動物学 腫瘍学 ゲノム科学 生物資源保全学 生物科学 基礎生物学 人類学 生産環境農学 農芸化学 森林圏科学 水圏応用科学 社会経済農学 農業工学 動物生命科学 境界農学 薬学 基礎医学 境界医学 社会医学 内科系臨床医学 外科系臨床医学 歯学 看護学

学術研究支援室URA (H29.4.1)



【学術研究支援室URAの 経歴・資格・専門スキル】

MBA・新聞編集記者・弁理士・JICA・JST・NEDO・家電メーカー・一級建築士・製薬企業・ライブラリアン・財団助成事業・大学発ベンチャー企業・女性研究者支援・MOU締結・産学連携・知財管理・研究倫理・生命倫理・科学技術ガバナンス・オープンアクセス・クラウドファンディング・データ分析・プログラミング・Public Engagement・STS・サイエンスコミュニケーション・サイエンスライティング・WEB/SNS広報・科学広報・国際広報 etc.

【学術研究支援室URAの 対応言語】

英語・ドイツ語・フランス語・タイ語・ヒンディー語・スペイン語・インドネシア語・スワヒリ語 etc.

20170501

A URA制度整備 (Aメニュー)

URAの育成・キャリアパス

組織経営

キャリアパス：URAのモチベーション向上と定着化には、業績によって公正に評価されるシステムの整備と安定雇用の実現が必要である。そこで、京都大学では**URAの職階整備・評価制度・雇用延長を確立し、更なる人事制度の整備に向けた検討**を始めている

キャリアパス

■ **雇用延長** 10年任期が可能に

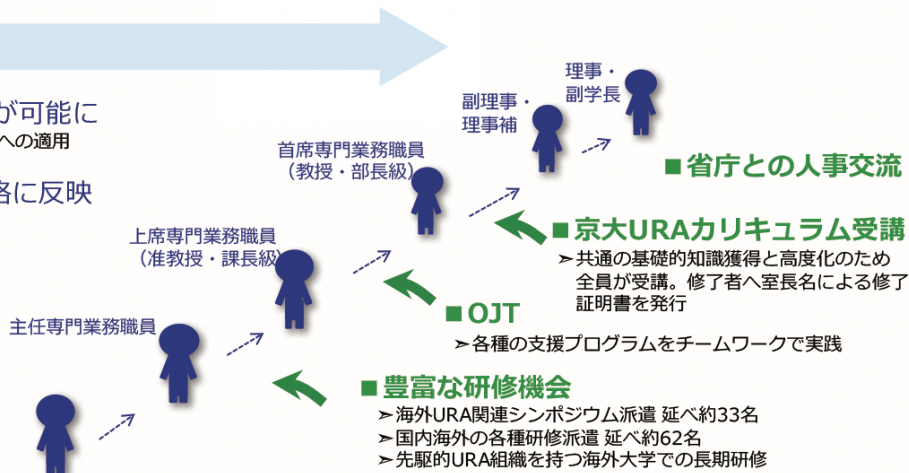
> 研究開発力強化法特例のURAへの適用

■ **評価制度** 給与、昇格に反映

> 勤務評定制定 (H28)

■ **URA職階整備**

- > 4階級の職階
- ・首席専門業務職員
- ・上席専門業務職員
- ・主任専門業務職員
- ・専門業務職員



スキルアップ：異なるバックグラウンドを持つURAが組織として質の高い支援を提供するためには、各URAがURAとして必要な基礎知識を獲得することが重要である。そこで、京都大学では**京大独自のURAカリキュラムを作成し、URAのスキルアップを図っている**。

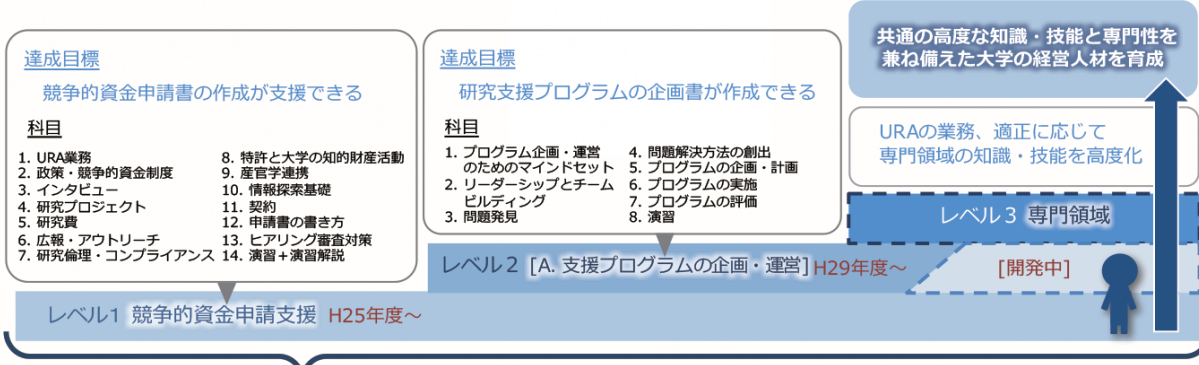
20170501

URA 育成カリキュラム

組織経営

【背景】 リサーチ・アドミニストレーター (URA) は新しい職種のため、共通の知識体系が十分に確立していない
KURAの多様な人材を組織で効果的に活用するためには、共通の基盤的知識が必要

【目的】 リサーチ・アドミニストレーションについて幅広い知識と優れた技術を有するURAを育成する



各URAが講義やワークショップで知識・技能を獲得
 各種の支援プログラムをチームワークで実践
京都大学 URA 育成カリキュラム × On the Job Training (OJT) = KURA



リサーチアドミニストレーションの知識基盤を確立

全員が受講

修了者数	
平成25年度	22人
平成26年度	12人
平成27年度	10人
平成28年度	11人

知識の好循環で組織が成長
 講師を内部で育成

- 教えることで学べる
- 京大の環境を内容に反映できる
- お互いの専門性を活かす

京都大学の研究環境を踏まえた独自のテキスト

2014年度 京都大学 URA 育成カリキュラム Level 1

申請書の改善ができる URA になるために

レベル1の講義14本は動画でオンデマンド視聴が可能

URAの高度化と定着に貢献
 キャリアパスともリンク

修了証を発行

受講者の声

- URAにとって必須の知識を学べた
- 実践的で今すぐ業務の参考になる
- 他大学のURAにも役立つかも

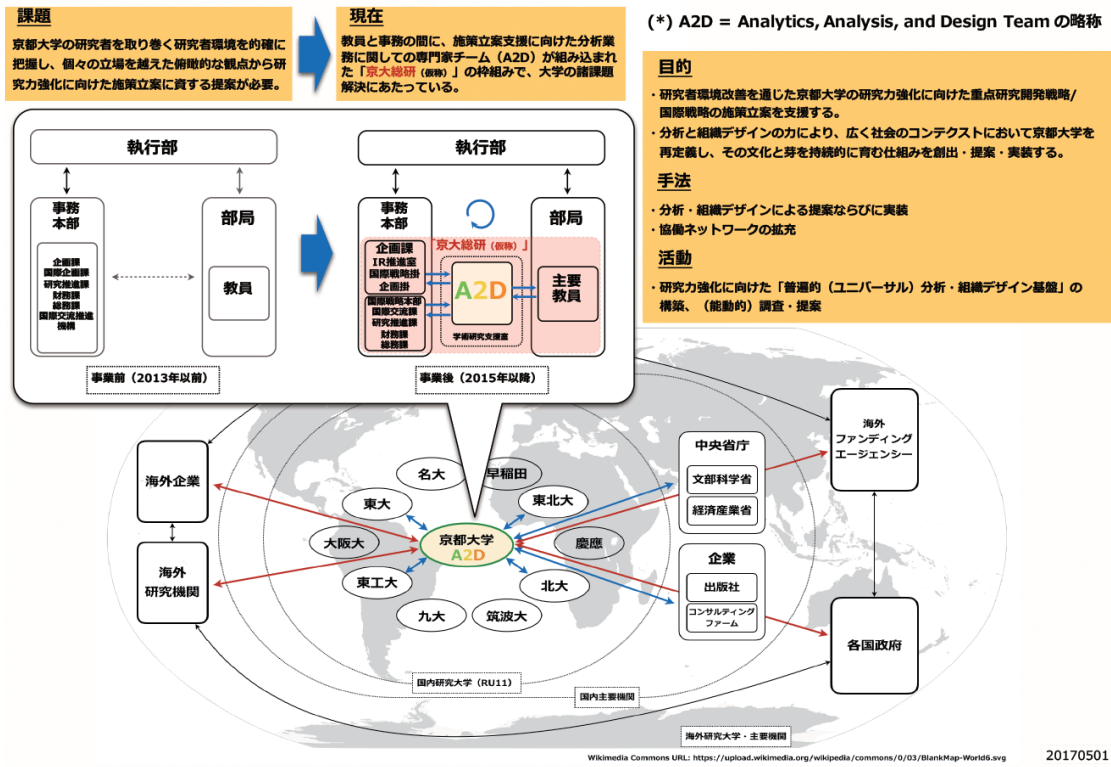
20170501

担当:天野URA

B URA制度整備 (Bメニュー)

研究力分析チームA2Dによる「京大総研(仮称)」の形成

組織経営 / 基盤整備



(*) A2D = Analytics, Analysis, and Design Teamの略称

A2Dの業務概要

京都大学内

- ・ 執行部・主要教員の施策立案に資する提案 (企画課・研究推進課との連携業務)
- ・ 国際戦略に資するデータ・分析結果の提供、提案 (企画課・国際戦略本部との連携業務)
- ・ 部局からの要望に応じた、書誌情報を含むデータ提供 (部局主要教員との連携業務)
- ・ 国際学会DSIR (Data Science and Institutional Research) 2015,2016 スペシャルセッション企画・運営

国内主要機関・中央省庁

- ・ エルゼビア・トムソンロイター主催の主要国際会議での講演・パネル登壇
- ・ 中央省庁部会での講演・討議
- ・ 共通の課題に対する他大学URAないしIRオフィスとの協働

海外主要機関・ファンディングエージェンシー等

- ・ 海外URA協議会 (米国、ASEAN地域、オセアニア等) での講演
- ・ 海外研究大学部局長会議での講演・討議
- ・ 海外研究大学・研究機関・ファンディングエージェンシー・その他海外機関との協働ネットワークの確立

背景写真: Elsevier社主催「Asia Pacific Research Intelligence Conference 2016」(於: 慶應大学) で講演した「Research Potential」の様子

A2Dの紹介

担当: 河本 URA

A2D (Analytics, Analysis, and Design Team) は、大学経営・研究者環境改善を念頭においた、本学ミッションに沿った形での研究力強化に向けた施策立案に資する能動的提案を行なっています。業務の主軸

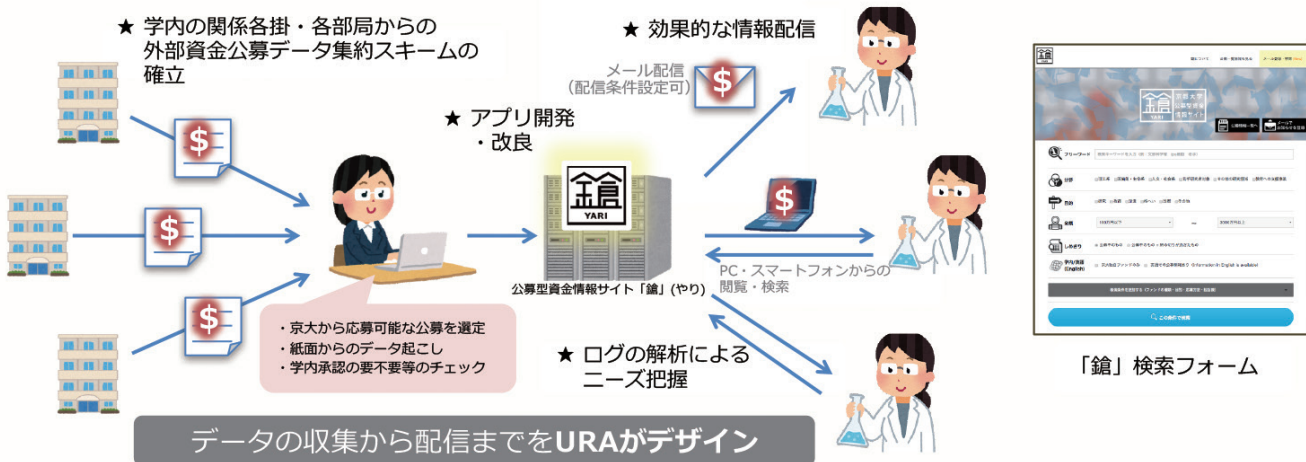
は、目的・研究者指向のゼロベース思考によるトップダウン分析・組織デザインの観点であり、データに基づくボトムアップアプローチも併用しています。本部事務組織、各部局主要教員とも協働し、本学各種部会、委員会やそこでの施策策定へコミットしています。

B URA 制度整備 (Bメニュー)

外部資金情報の集約と効果的な配信 (鎗)

基盤整備

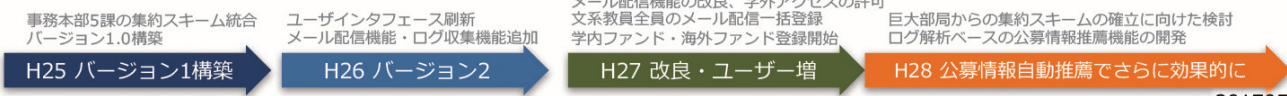
URA が事務と協働して外部資金情報の効率的な収集スキームを構築



データの収集から配信までをURAがデザイン

- 効果**
- 外部資金公募への申請数の増加
 - 教員の外部資金情報に対する意識・理解度の向上
 - 事務作業の効率化

年度毎の PDCA サイクルによる改良



20170501

研究者の声

「もっと早く知りたかった」

「メール配信されるのは中々よい」

「着任したばかりなので有り難い。ぜひ使わせてもらう」

「新しい分野にチャレンジするため

応募可能な資金を知りたいので助かる」

2017年4月時点の運用実績：

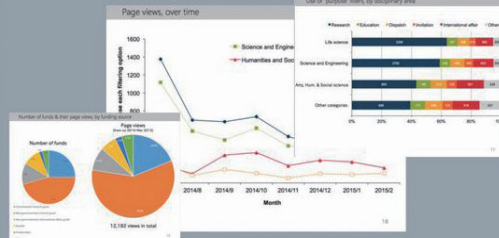
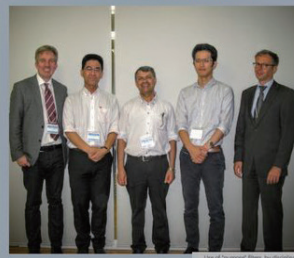
登録件数：約2500件

メール配信登録者数：750人

平日平均アクセス数：450PV

(2012年運用開始)

京大URAがデザインしたスキームを学外にも発信



国際会議DSIR2015で発表*

*Y. Yamamoto et al. "Can We Understand Researcher Grant Needs Without Direct Communication?", DSIR 2015, Okayama, Japan, July 2015. doi:10.1109/IIAI-AAI.2015.162

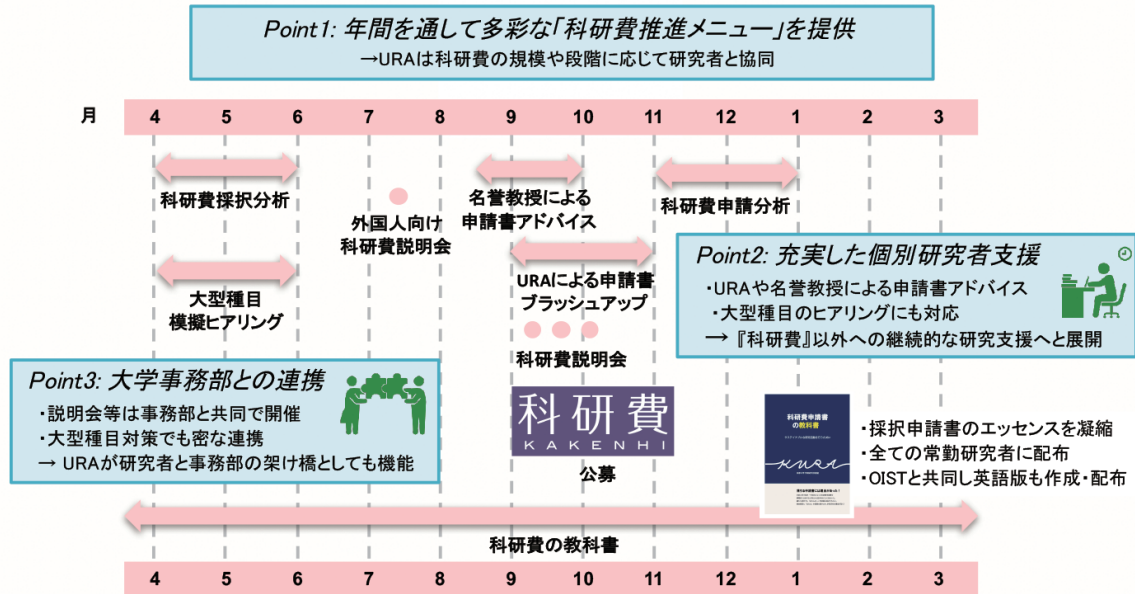
20170501

B URA制度整備 (Bメニュー)

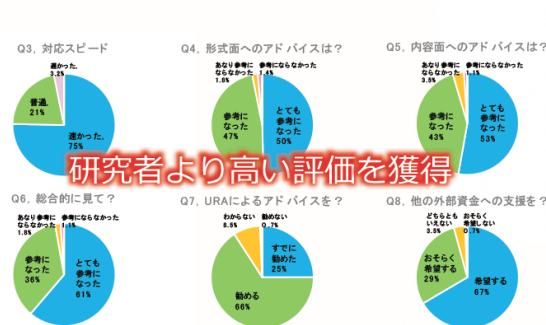
科研費申請支援タスクフォース

技術提供

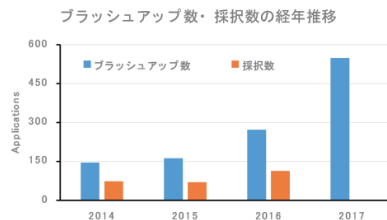
- 【目的】**
- ・ 様々な科研費推進メニューを展開し、研究者の科研費獲得に貢献する。
 - ・ 研究者とURAの信頼関係を構築し、継続的な研究支援に展開する。



20170501



**KURA一体化により
計画調査ブラッシュアップ規模を大幅に拡大**



京大科研費の20%超をカバー

- ・ 申請書を通じた特許や産学連携相談
- ・ 他の外部資金情報の提供・獲得
- ・ 共同研究の提案

**科研費獲得に留まらない
研究推進の好循環を達成**



20170501

タスクフォースの紹介

担当: 田上URA

科研費申請支援タスクフォース (TF) は、科研費の申請支援をきっかけとした「持続的な研究発展への貢献」を目的に活動しています。KURA では、『科研費申請書の教科書』の発行などで、科研費申請を支援してきました。2013年以降は、各部署に URA 室が設置された

ことを生かし、「研究者個人に向けた申請支援体制の充実」も模索してきました。

科研費申請支援 TF はこれまでの知識を結集し、組織一体化のスケールメリットを活用することで、採択率の向上を目指しています。さらに、科研費以外の外部資金獲得や共同研究の開始など、科研費にとどまらない「研究支援の好循環」の達成を最大の目標としています。

B URA制度整備 (Bメニュー)

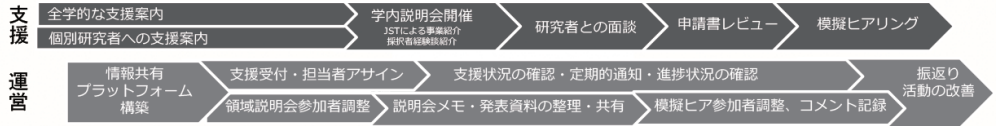
CREST・さがけ獲得支援

技術提供

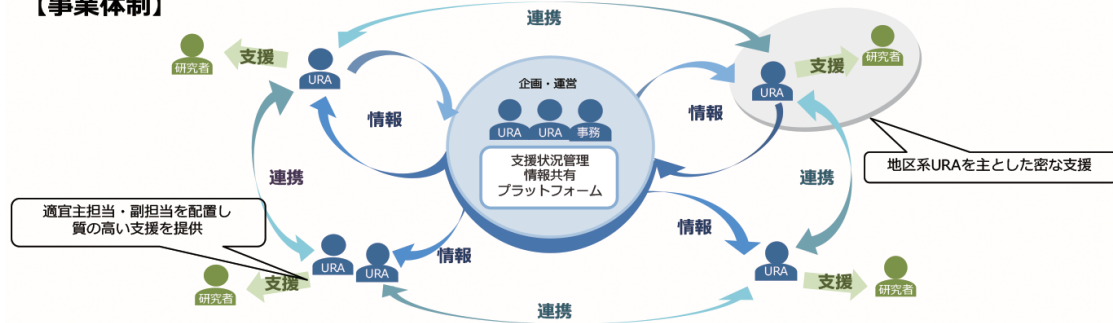
【課題】 公募領域の研究テーマを持つ研究者が、適切なタイミングで応募できる環境づくり

【目的】 CREST・さがけの獲得を支援し、革新的な研究成果が生まれる環境を創造する

【手段】



【事業体制】



効果的・効率的で質の高い支援を提供するため、「URA間の連携」と「情報の還流」を最適化する体制を構築 20170501

全学的な外部資金獲得支援スキームの確立
他の資金獲得支援のモデルとなる

採択者の声

申請書のレビュー
「自分では見落としがちな客観的な意見をもらえたので助かりました」

模擬ヒアリング
「実際に人前で発表すると、スライドや台詞の不十分な点が明らかになる。また質問対策もある程度できる」

URA
「研究者の視点も持ち合わせているので安心できる」

次のCREST・さがけや他の外部資金につながる好循環

イノベーション指向の研究の量と質の向上
イノベーション指向の研究について研究者と共有した数のべ284人
(H27年～H28年の説明会参加者・獲得支援依頼者数)

20170501

プログラムの紹介

担当: 橋爪URA

イノベーション指向の研究を推進する競争的資金「CREST・さがけ」の採択数増加を目指し、公募研究領域に適する研究テーマを持つ研究者に、適切なタイミングで十分な情報をもれなく提供するとともに、応募研究領域にとって研究者の提案内容がより魅力的になるよう、申請書レビューや模擬ヒアリングなどを行っています。URA間の「連携」と「情報の還流」の最適化を通じて、全学的な外部資金獲得スキームを構築することで、効果的・効率的で質の高い支援を提供しています。

研究者(採択者)の声

- ・申請書レビューでは見落としがちな客観的な意見をもらえたので助かった。
- ・模擬ヒアリングで受けた質問・コメントのメモを活用し、本番での質疑応答対策を入念に行えた。
- ・模擬ヒアリングで受けた質問は、本番より厳しかった。そのおかげで本番の質疑応答では詰まらずに答えることができた。
- ・URAは、研究者の視点も持ち合わせているので安心できる。

B URA制度整備 (Bメニュー)

AMED 研究費獲得支援

技術提供

【目的】 AMED申請数増加・採択率向上を通じた、京都大学の医学研究発展への貢献

【内容】 研究内容とAMED各事業趣旨等を包括的に理解した支援



- ★: 各事業の公募開始日に「事業のポイントまとめ」を作成しメール送付
- ★: 研究内容を把握。事業趣旨に合致し、審査要件を満たすストーリー（スライド骨子）を提案・ディスカッション
- ★: 研究内容について、①アピールすべきポイントが明確か ②事業趣旨と合致しているか ③審査要件を満たしているかをチェックし、大枠コメントと改善案を送付（必要に応じて面談実施）
- ★: 提案書全体について、①大枠コメントが反映されているか ②研究内容以外の記載も正確かを、審査委員/職員両方の視点からチェック
- ★: ①事業趣旨との合致/審査要件の網羅性/研究のアピールポイントが明確かをチェック ②専門家/非専門家両方の立場から多面的な質疑応答（必要に応じて回答に対する助言等） ③スライドレイアウト等のチェック
- ★: 研究者と密にやり取りを行い、完成度の極めて高い提案書（ヒアリング資料）の仕上げ

20170501

面談～ヒアリング審査支援まで行った事業の採択実績（平成28年度）

支援件数	書面審査通過件数（書面審査通過率）	採択件数（採択率）
12 件	11 件（92 %）	7 件（64 %）

★機関申請採択：1件

- ・「生物統計家育成支援事業」国内で2拠点のみ選定

拠点形成に貢献

★企業とのマッチング支援&AMED事業獲得支援による採択：1件

- ・「創薬基盤推進研究事業GAPFREE2」
企業拠出金+AMED拠出金による
リバーストランスレーショナル研究推進

企業とのマッチング成立
およびAMED資金獲得に貢献

<支援を行った事業（申請相談のみも含む）（平成28年度）>

「次世代がん医療創生研究事業」、「創薬基盤推進研究事業（GAPFREE2）」、「再生医療実現拠点ネットワークプログラム（幹細胞・再生医学イノベーション創出プログラム）」、「Medical Artsの創成に関する研究（外科、がん、看護、リハビリ等の新たな医療技術やソフトウェアの開発）」、「産学連携医療イノベーション創出プログラム（ACT-M）」、「ゲノム医療実用化推進事業」、「難治性疾患実用化研究事業」、「医と食をつなげる新規メカニズムの解明と病態制御法の開発」、「生物統計家育成支援事業」、「研究倫理に関する情報共有と国民理解の推進事業（ゲノム医療実用化に係るELSI分野）」、「創薬技術シーズの実用化に関するエコシステム構築のための調査研究事業」、「研究公正高度化モデル開発支援事業」、「循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業／腎疾患実用化研究事業〔合同公募〕」、「肝炎等克服実用化研究事業」、「臨床研究・治験推進研究事業」、「医療機器開発推進研究事業」、「免疫アレルギー疾患等実用化研究事業」、「臨床ゲノム情報統合データベース整備事業」、「障害者対策総合研究開発事業」、「ゲノム医療実現推進プラットフォーム事業」、「革新的がん医療実用化研究事業」、「革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト」、「医療分野研究成果展開事業（先端計測分析技術・機器開発プログラム）」、「医工連携事業化推進事業」、・・・

20170501

プログラムの紹介

担当: 杉山URA

生命科学系大型競争的資金のAMED各事業において、提案書作成とヒアリング審査を支援しています。重視しているのは、「研究内容」と「各事業の趣旨等」の両方を理解した支援です。年間を通じて不定期に数十事業の公募があり、公募期間も約1カ月と短いため、迅速な情報伝達を目指して公募開始日に研究者へ情報を展開しています。また、「研究内容と事業趣旨が合致しているかどうか」といった申請に関する相談も受け付けています。

速な情報伝達を目指して公募開始日に研究者へ情報を展開しています。また、「研究内容と事業趣旨が合致しているかどうか」といった申請に関する相談も受け付けています。

B URA制度整備 (Bメニュー)

融合チーム研究プログラム SPIRITS

国際 / 学際 / 人際 / 資金提供

SPIRITS

SUPPORTING PROGRAM FOR INTERACTION-BASED INITIATIVE TEAM STUDIES

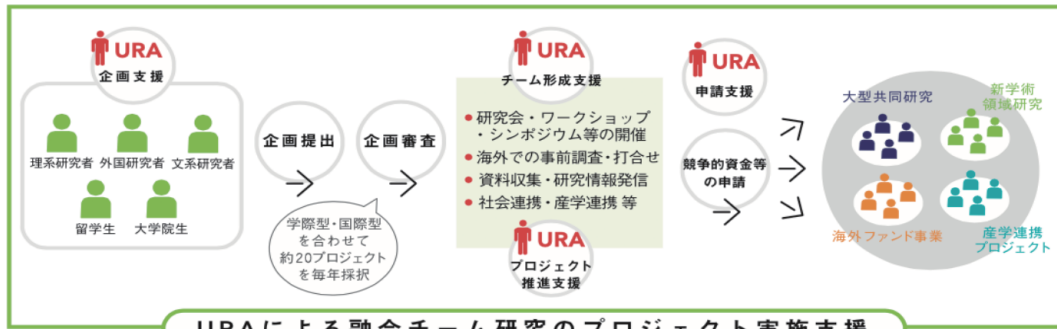
国際化の推進、未踏領域・未科学への挑戦、イノベーションの創出を加速させるため、URAが運営し、国際的・学際的チーム研究を支援する学内ファンド

学際型 未踏領域の開拓に挑戦する異分野融合研究チームの形成支援

国際型 海外の研究組織・研究者との新たな国際共同研究チームの形成支援

特徴

1. 研究大学強化促進事業補助金だけでなく、自主財源も活用 → 研究者ニーズに合わせて使いやすい制度設計
2. 他の支援プログラムと効果的に連携。研究プロジェクトの発展をさまざまな方法で加速
3. URAがプロジェクトに伴走。きめ細かなフォローをしながらURAとして成長



URAによる融合チーム研究のプロジェクト実施支援

目的①

革新的・創造的研究の創出

目的②

研究マインドを共有するURAの育成

目的③

プロジェクトマネージャー型研究リーダーの創出

20170501

	平成25年度採択プロジェクトの成果	平成26年度採択プロジェクトの成果
	学際型 15 件 国際型 52 件 (うちトップダウン型 3件)	学際型 6 件 国際型 13 件
特筆すべき成果	<ul style="list-style-type: none"> 東南アジア研究コンソーシアム (SEASIA) のスタートアップ経費として、ネットワーク拡大、体制整備等に活用。H27年のJASTIP設置に寄与。 研究計画の実現を目指して活発に活動した結果、日本学術会議「マスタープラン2014」に取り上げられ、かつその重点大型研究計画の一つに選出。 	<ul style="list-style-type: none"> H26にブリストル大学と、続いてH27にハイデルベルク大学と共同ワークショップを開催。3大学植物園間協定を締結。 フランスの研究者との間で活発な交流を深め、ポルドー大学を中心とするCNRSの国際共同ラボに採択。 次世代通信システムの開発と国際標準化において、日本・インドネシア間の国家レベルの協定を締結。
革新的・創造的研究の創出・発展	<ul style="list-style-type: none"> シンポ、ワークショップ、研究会開催：国際50回、国内34回国際研究ネットワーク形成・拡大：27件、新たな国際共同研究の開始：15件、産学連携開始：6件、MOU締結：4件、特許出願：5件、受賞：13件 競争的外部資金申請：68件、獲得：46件 	<ul style="list-style-type: none"> シンポ、ワークショップ、研究会開催：国際30回、国内4回 学際・国際研究ネットワーク形成・拡大：14件、新たな学際・国際共同研究の開始：9件、産学連携開始：6件、MOU締結：3件、特許出願：10件、受賞：15件 競争的外部資金申請/獲得：38件/29件
PM型研究リーダーの輩出	<ul style="list-style-type: none"> 1,000万円以上の競争的研究資金の研究代表：3人 (5件) 多くのPJで若手をメンバーに加えて育成 (助教、ポスドク等の若手研究者79名、大学院生等の学生123名がPJに参画) 	<ul style="list-style-type: none"> 1,000万円以上の競争的外部資金の研究代表：7人 (8件) 多くのPJで若手をメンバーに加えてリーダー育成 (助教、ポスドク等の若手研究者のべ51名、大学院生等の学生のべ94名がPJに参画)
研究マインドを共有するURAの輩出	<ul style="list-style-type: none"> URAによる伴走型支援を実施したプロジェクト数：21 伴走型支援を実施したURA数：12名 (のべ29名) 	<ul style="list-style-type: none"> URAによる伴走型支援を実施したプロジェクト数：8 伴走型支援を実施したURA数：9名 (のべ11名)

現在進行中のプロジェクト

	平成28年度採択	平成29年度採択
学際型	4 件	4 件
国際型	12 件	13 件

平成26年度採択プロジェクト成果報告会



代表者、メンバー、URAをまじえて、新たな学際研究を構想するワークショップを実施



ポスターセッションで、異分野ネットワークを促進

20170501

プログラムの紹介

担当:天野URA

京都大学の改革と将来構想 (WINDOW 構想) に基づき、本学の国際化の推進、未踏領域・未科学への挑戦、イノベーションの創出を加速させることを目的とした学術研究支援室の中核事業として実施しているのが、SPIRITS プログラムです。目的に応じて、国際型、学際型の2つのタイプのチーム研究を学内ファンドで支援しており、これまでに、海外研究機関との国際共同研究協定締結や、人文社会系と自然科学系の研究者を巻き込んだ、新たな学際研究ネットワークの構築などの成果を挙げています。

採択者の声

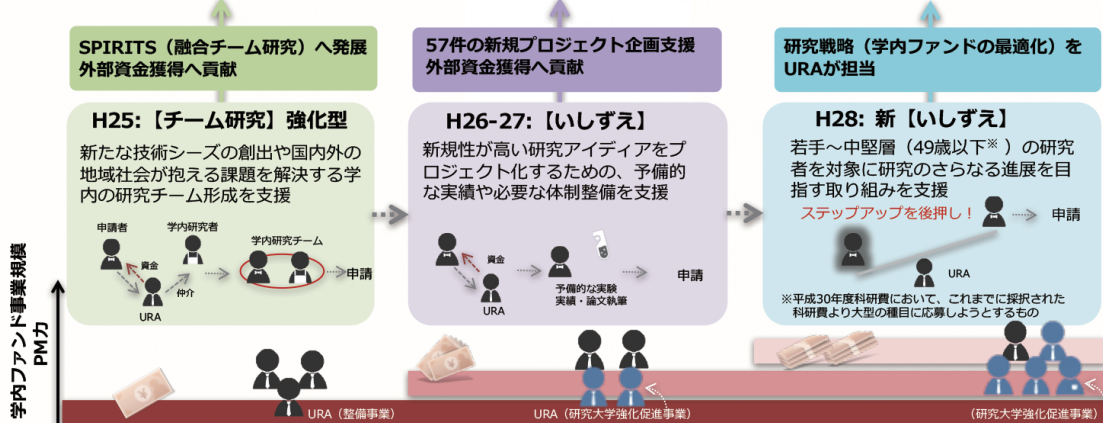
- ・当初予定していた国際交流のみでなく、訪問先で新しいネットワークを形成できた点で非常に役に立ちました。
- ・国際共同研究の開始にあたり、非常に有意義な制度だと思います。
- ・JSTのプロジェクトで形成した学際的な研究組織の継続や、プロジェクトで連携が始まった国際的な共同研究に非常に役立っています。
- ・手厚い支援により、研究者交流が進みました。

B URA制度整備 (Bメニュー)

【いしずえ】京都大学リサーチ・ディベロップメントプログラム

国際 / 学際 / 資金提供

【目的】 新規性が高く世界的に評価される研究を支援する学内ファンドの礎をURAが構築する



- 学術研究支援室のURAと研究推進課が連携して実施
- 年間120件（最大）の応募受付→審査→資金配分（約40件）
- URAが大学研究戦略の学内ファンドをPMとして企画・運営を実施

- (H28年度 約40件)
- 科研費獲得支援プログラムと連携し、次年度科研費に高採択率で採択
- (H25-27年度 全75件)
- いしずえ採択者全員が外部資金に応募、採択は半数以上
- 科研費基盤研究 A (3件)/基盤研究 B (3件)/ JST-JICA SATREPS (1件)/ JST さきがけ(2件)/ SIP(1件)等採択へ貢献
- (H25年度 チーム強化型)
- H25年度の制度が研究大学強化促進事業SPIRITSの礎として定着

20170501

PM力を強化

URAが

- 学内ファンド最適化（研究戦略）を実施
- 実践的なプロジェクト・マネジメントによりPM力を強化

外部資金獲得増に貢献

採択者から満足の声

おかげさまをもちまして、今年度科研費採択に至りました・・・大変感謝しています。

添削、そしてさまざまなお支援・・・サポートくださり、本当にありがとうございました。

20170501

【いしずえ】の紹介

担当: 園部URA

個人の研究プロジェクトの飛躍を支える「礎」となるべく、研究実績や体制強化に向けた最後の一押しを支援する学内ファンドです。KURAの他の事業とも連携することで、資金面だけでなく、研究内容にまで踏み込んだきめ細やかな支援を心がけています。研究フェーズや年齢層に応じた効果的なファンド構築を目指して毎年事前調査を行い、制度を設計しています。これらの企画・設計・運営・評価・改善を通じて、URAのPM能力の向上も目指しています。

採択者の声

【科研費基盤研究 (C) 採択 准教授】

おかげさまをもちまして、今年度の科研費採択に至りました。これまで何年間も当たらなかったにもかかわらず、前年度いしずえさんの科研費で研究させていただいたことや、そのことを科研費申請書に書くことができたことが、採択の大きな要因だったと大変感謝しています。

【SATREPS 採択 准教授】

今後5年間のプロジェクトですが、「いしずえ」によって予備実験が進み、見通しを立てることができました。深く御礼申し上げます。

B URA 制度整備 (Bメニュー)

【みがき】英語論文校閲支援制度

国際 / 資金提供

H29年度より【みがき】の制度が大幅に変更されます

【目的】外部資金の無い若手研究者に対して、充実した英文校閲サービスを提供する

【対象】

英語による論文執筆の経験が浅く、英文校閲に使用できる外部資金が無い若手研究者

【手段】

年1回(9月中旬)募集を実施。応募条件を満たす若手研究者10-15名(予定)に対し、外部業者による年間を通じた複数回の校閲等の包括的サービスを提供。

【効果】

- 英文校閲に使用できる自己資金の無い若手研究者が、論文投稿に向けて充実した校閲サービスを受けることが出来る
- 校閲の過程を通じて、英語論文の体系的な書き方を習得



- ・ 学術研究支援室 (KURA) の URA ・ 事務職員が実施
- ・ 実績の高い英語論文校閲業者を選定し、年間を通じて複数回校閲を受けることができる制度を構築

掲載された国際学術雑誌の例
 Scientific Report (総合分野5位/56誌)、Journal of the American Chemical Society (化学分野10位/157誌)、Cell Reports (細胞生物学分野27位/184誌)

20170501

H27年度は「英語論文改善ワーク ショップ」を理系・人社系に分けて実施

論文原稿への個別面談も含め、体系的な書き方を学ぶ

H26年度から計126人の研究者を支援

(※チラシはH27年度のものです)

English Manuscripts Proofreading Program

支援額
 1件につき、原則最大10万円程度。ただし、校閲の分量が多い場合は、10万円を超えて支援する場合があります。

校閲対象
 ・ジャーナル論文・レター論文
 ・査読付き国際会議プロシーディングス
 ・レビュー論文(総説)

問い合わせ先
 京都大学 学術研究支援室 研究開発プログラム 英文校閲費支援制度担当
 proofreading@kura.kyoto-u.ac.jp

募集期間
 11月16日から18日まで

論文投稿の最後の一押し「英文校閲費」を支援します。

みがき専用Webフォームを通じて申請手続きを簡素化

English Manuscripts Proofreading Program: Kyoto University Research Development Programs 2016

20170501

【みがき】の紹介

担当:若松 URA

国際ジャーナルに論文を投稿する際に、研究内容が優れているにもかかわらず、論文の英語が一定のレベルに達していないために採択されないことがあります。【みがき】英語論文校閲支援制度は、よりレベルの高い国際ジャーナルへの投稿する研究者や、英語論文の作成経験が浅い若手研究者を対象に、英文校正業者による校正サービスを提供しています。採択者は初回の校正に加え複数回の再校正サービスが受けられます。

採択者の声

- ・ この制度のお陰で、採択された論文だけではなく、今後の論文等作成の表現の幅が広がったと感じます。多くの研究者が利用できる制度になればと思います。
- ・ 通常は自分で負担していたので経済的に助かります。
- ・ とても助かりました、有難うございました。今後も継続して特に若手教員に対する補助を手厚くしてもらえると助かります。

B URA制度整備 (Bメニュー)

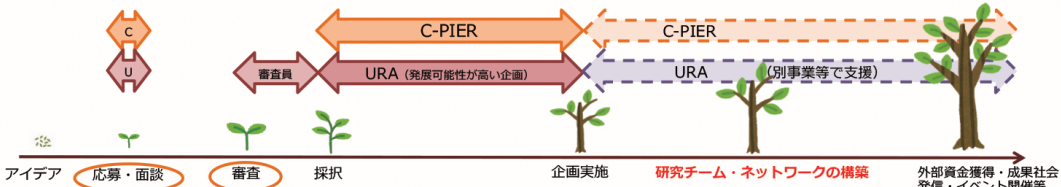
分野横断プラットフォーム構築事業

学際 / 資金提供

【目的】 より多くの学際研究が芽吹くためのプラットフォームを構築する

<p>【対象】 新たな学際（共同）研究の萌芽的アイデアがあり、研究プロジェクトの実現に向けて動き出そうとしている研究者（以下、企画者と称す）</p>	<p>【手段】 ワークショップや研究会の開催支援、コンテンツ作成支援、各種助言、人の紹介などを通して、企画者と学内外の研究者、省庁、自治体、企業、NPO、市民等とつながる場／機会／環境を醸成・拡充</p>	<p>【効果】 ・分野横断型の多様な研究チームやネットワークの形成 ・学際力（多角的な視点・広い視野、異分野間のコミュニケーション力等）とPM力（運営ノウハウ、事務能力、意見をまとめ上げる等）をもった研究者の増加</p>
---	---	---

【事業体制】 新たな学際研究のアイデアを、芽吹かせ、研究チーム・ネットワークを作るまでを支援

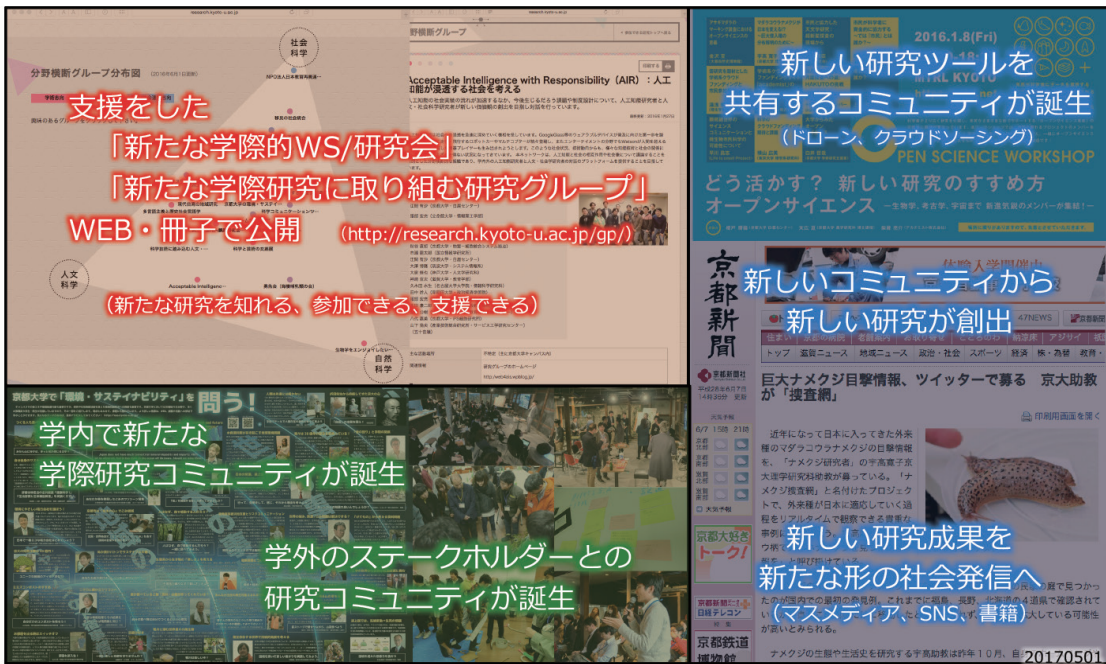


- ・学術研究支援室（KURA）のURAと学際融合教育研究センター（C-PIER）の教員が連携し実施
- ・開催経費を支援
- ・年間約10数件の応募受付 → 面談 → アドバイス
- ・年間約10件の新規企画を採択、新しい学際研究チームを創出し、新規ワークショップと研究会を開催 (<http://research.kyoto-u.ac.jp/gp/>)

新規WS/研究会代表例 (H25-28年度 全61件)

「オープンサイエンス革命を活用した研究スタイルの実践と新展開」
 「ドローンのフィールドサイエンス活用研究と強化実習」
 「若手再生エネルギー実践者研究会」 「環境エンジニアリング実践WS」
 「歴史の受容からみる東アジア」 「消滅危機言語復興研究のためのWS」
 「多言語主義と歴史社会言語学」 「台湾とは何かを再考する」
 「匂いコミュニケーションメディアの構築と社会環境の醸成」
 「文理融合授業の実践とその方法論の開拓」
 「人工知能技術が浸透する社会を考えるWS」

20170501



事業の紹介

担当:白井URA

本事業は学際研究のアイデアを芽吹かせる学内ファンドです。研究者の斬新なアイデアと熱いモチベーションから、成果が思わぬ展開に繋がることも珍しくありません。そもそも「研究成果」とは何か？「研究力」とは何か？を深く考える機会にもなる事業です。

研究者の声

- ・ワークショップ支援を得て遠方から話題提供者を招聘できたため、これまでの関西地区における手弁当のイベントでは実現できなかった全国区のネットワークが構築できつつある。一般公開イベントとして広報したことで、不参加だった研究者にも我々の活動の趣旨が伝わり、出張先や学会等で声をかけられるケースも増えた。
- ・所属する学問分野から任意に演者を集めて「セミナー／研究会」を開催する経験は今までもあったが、明確なコンセプトの元に企画を作るケースは初めてであり、勉強になったと同時にその難しさも実感した。だが、ワークショップ後の交友関係の広がりや、参加者からの「楽しかった」という声をモチベーションとして、これからはできる限りこのような取り組みを継続していきたいと思っている。

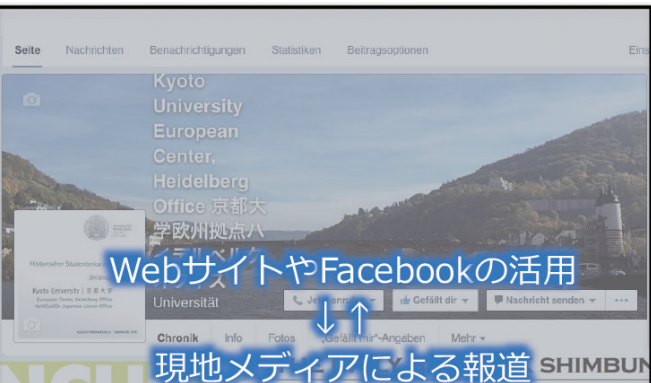
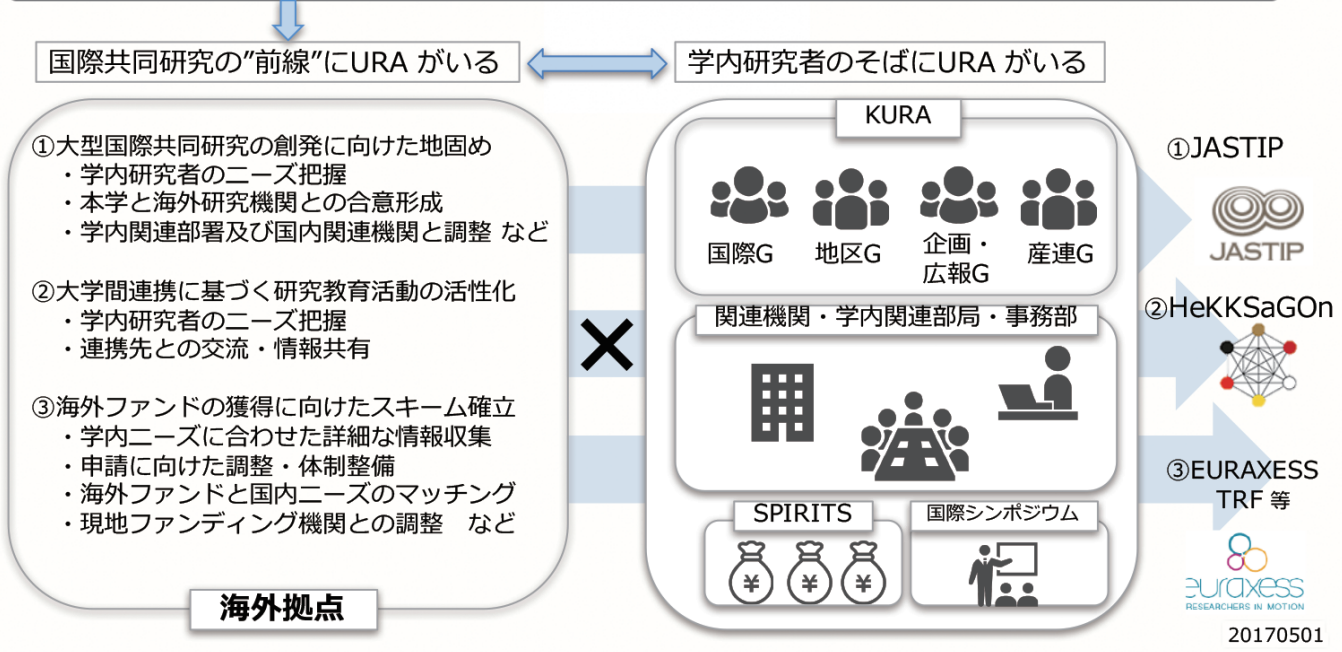
B URA制度整備 (Bメニュー)

海外拠点の設置：地域・文化を超える

国際 / 人際 / 広報

【目的】 国際的に卓越した国際競争力のある研究の推進、世界的に通用する国際力豊かな人材（教職員・学生）の育成支援、地球社会の調和ある共存に資する国際貢献の推進

【手段】 京都大学の全学拠点（バンコク、ハイデルベルク）にURAが滞在



担当：神野URA

B URA制度整備 (Bメニュー)

国際シンポジウム

国際 / 機会提供

【目的】 世界をリードする研究大学であるために、国際的プレゼンス向上の場を創出する

<p>【対象】 新たな国際的ネットワーク構築や国際共同研究への欲求があり、そのためのカウンターパートを求めている研究者</p>	<p>【手段】 相手機関(大学)との調整、研究者とセッション構築、告知案内、シンポジウムの開催支援、開催後のフォローアップ、資金獲得支援</p>	<p>【効果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際的なネットワークと国際的な研究発信力をもった研究者の増加 国際共同研究の創出、外部資金の獲得、国際連携の深化、国際プレゼンスの向上
--	---	---

【ビジョン】 点から線、線から面へ：研究者が出会い、協定や相互交流、資金支援でつながり、国際共同研究等が創出される



- 学術研究支援室 (KURA) 及び海外拠点駐在のURA、事務職員、国際交流課の職員が連携して企画、運営
- 1回当たり約100名の研究者、約10セッション
- 開催概要・報告の日英ウェブ掲載、世界へ発信
- 研究者交流の継続、国際ネットワークの形成拡大
- 国際イベント開催による**事務職員の国際力向上**

国際シンポジウムを契機とした成果事例
(開催数 13件、セッション数 124、のべ研究者数 1,203人)

Collaboration Agreementの締結 (スイス)、大学植物園間協定書締結 (プリストル、ハイデルベルク)、学術・学生交流協定締結 (ポルドー)、ジョイント・ラボの立ち上げ (ポルドー)、資金獲得による国際共同研究の立ち上げ (プリストル、ポルドー)

*H29年度から部局提案型のシンポジウムが中心となるため、URAの支援はシンポジウム開催後のフォローアップがメインになる見込み。

20170501

平成24年度国際シンポジウム 報告ページ (ウェブサイト) → 平成28年度国際シンポジウム 報告ページ (ウェブサイト)

国際シンポジウム紹介ページの刷新
(京都大学の国際活動を俯瞰⇒内容の可視化⇒国際的な研究力を発信)

京大式 国際シンポジウム業務マニュアル

京都大学 京都大学企画・情報部国際企画課、学術研究支援室

マニュアル整備により 事務の国際化に貢献
(国際シンポジウム業務マニュアル)

国際プレゼンスの向上

連携協定の締結や共同ラボ設置による 交流の深化・共同研究の実現
(Photographer: (大学植物園交流、学術交流、学生交流、共同ラボ)者集合写真)

本学の国際活動を包括的に紹介するウェブ構築
(<http://www.oc.kyotc-u.ac.jp>)

20170501

担当: 神野URA

B URA 制度整備 (Bメニュー)

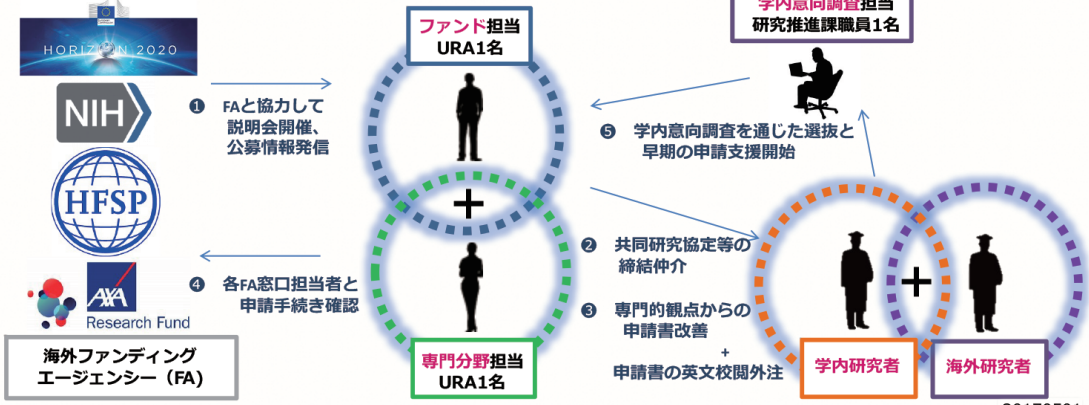
海外ファンド獲得支援制度

国際 / 技術提供

【目的】 海外の大型研究ファンドの申請数・採択率を向上させる

<p>【対象】 海外の大型研究ファンド (Horizon2020, NIH, HFSP, AXA Research Fund等) に申請する学内研究者</p>	<p>【手段】 各海外ファンドの公募に合わせて ・説明会の開催・公募情報の発信 ・学内意向調査を通じた申請者情報の把握 ・重点的な申請支援 (ファンド担当URA+専門分野URA+英文校閲外注)</p>	<p>【効果】 ・各海外ファンドへの申請件数・採択率の向上 ・採択された学内研究者の国際的レピュテーションの向上 ・「外部資源の内在化」を目指す研究大学として京大の戦略的研究推進に貢献</p>
--	---	---

①低い認知度、②多国間にまたがるチームング、③言葉の壁、④申請手続きの煩雑さ、⑤高い競争率 海外大型研究ファンド特有の障壁を乗り越えていくには？



●H28年度の実施結果

海外ファンド名	公募説明会	学内意向調査	書面審査対応	二次審査/ヒアリング対応	採択結果
Horizon 2020 (日欧共同公募)	×	×	×	×	×
NIH (R01)	×	●	●		1件採択
Human Frontier Science Program (Research Grant)	×	×	×	×	×
AXA Research Fund (Postdoc/ Chair)	×	●	●	×	×
Harvard Yenching Program	●	●	●	●	×
Abe Fellowship Program	●	●	×	×	×

【H28年度の支援概要】

- 公募説明会等は国内に連絡窓口がある資金配分機関 (Harvard Yenching Program, Abe Fellowship) と協力して学内で実施
- 書面審査対応を行ったNIH申請3件のうち、1件が採択
- NCURA (北米URA団体) より「米国外の研究者が申請可能な米国ファンドリスト」を取得し、適宜情報提供
- 個人型の研究ファンド (Harvard Yenching Program, AXA Postdoc) はURAの支援で書面審査は通過

●H29年度 支援スケジュール

形態	意向調査	H29 海外ファンド公募スケジュール	2017										2018				
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
チーム型	●	Horizon 2020 (日欧共同公募)	■														
	●	NIH (R01)			■												
	×	Human Frontier Science Program (Research Grant)															■
	●	AXA Research Fund (Postdoc/ Chair)			■												
個人型	●	Harvard Yenching Program							■								
	×	Abe Fellowship Program															

海外ファンド獲得支援制度 の紹介

担当: 若松 URA

Horizon2020, National Institutes of Health, AXA Research Fund といった海外大型研究資金に対して、公募説明会等の情報提供を始め、申請書のブラッシュアップ (英語および専門内容)、共同研究協定締結の仲介、さらに採択後の経理手続きまで、URA が担当部局事務と協力して進めていきます。大型研究ファンドだけでなく、個人で申請する海外のファンド (Harvard Yenching Program, Abe Fellowship 等) も支援しています。

利用者の声

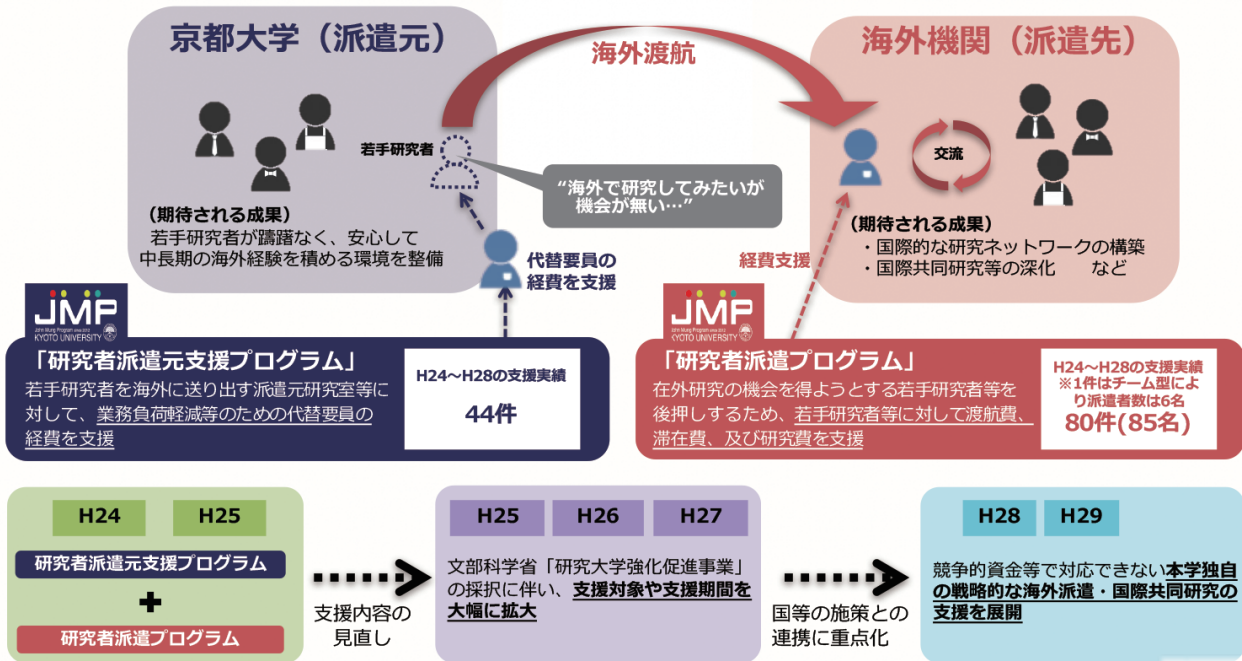
- 【Harvard Yenching Program 申請者】**
・非常に懇切丁寧なご指導をたまわり、本当に感謝しております。(今後の研究について) 目標設定や道筋をより明確化していただき、引き続き研究を進めていく力が湧きました。
- 【Horizon2020 申請者】**
・今回の件では大変お世話になりました。(URA の) 皆様のご協力なしには文字通り不可能でした。
- 【AXA Research Fund Postdoc Program 申請者】**
・I really appreciate your generous help and support through the application process. Thank you very much.

B URA制度整備 (Bメニュー)

ジョン万プログラム

国際 / 人際 / 資金提供

【目的】次代を担う若手研究者の国際的な研究活動の強化、促進



JMP 京都大学 若手人材海外派遣事業
JOHN MUNG PROGRAM KYOTO UNIVERSITY
ジョン万プログラム

World's Top Universities
Oxford University
Cambridge University
Leadership
Expertise
Global Vision
Aspiration
Challenge

国際競争に果敢に挑戦する
次世代のグローバル研究リーダーの養成

国際共同研究等の深化による
優れた研究成果の創出
派遣先との国際共著論文

人的交流を通じた
国際研究ネットワークの構築
研究者派遣プログラム採択者の派遣先
・米国40名: Harvard, Stanford, MIT, etc.
・英国16名: Oxford, Bristol, UCL, etc.
・独国 8名: Göttingen, Bonn, Tübingen, etc.
・ほか22名: シンガポール、仏国、オーストリア、ベルギー、スイスなど
※H24～H28の支援実績
20170501

プログラムの紹介

担当: 研究推進課

ジョン万プログラムは、京都大学の国際競争力の更なる強化のため、次代を担う若手教員の国際的な研究活動の強化・促進を目的として、在外研究（海外大学等での研究や国際共同研究への参画等）を行う

若手研究者を奨励・支援しています。若手研究者が海外の優れた大学等研究機関において研究し、国際的な研究ネットワークの構築や国際共同研究等の深化等によって今後のグローバルな研究交流等の発展に資する基礎を築き、将来にわたる研究活動の国際展開や外部資金獲得機会の拡大等に繋げることを目指しています。

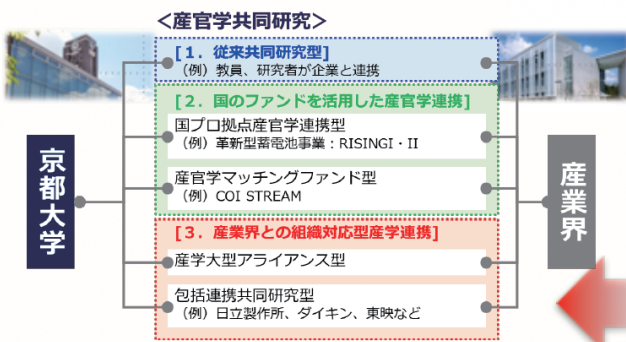
B URA制度整備 (Bメニュー)

イノベーション・エコシステム構築事業

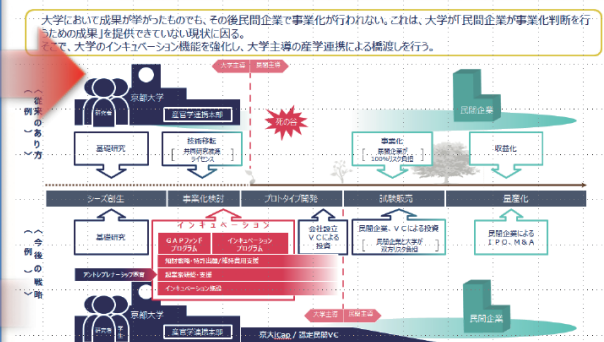
人際 / 産学連携

【目的】 より多くのイノベーションが芽吹くためのエコシステムを構築する

○共同研究推進型



○イノベーション推進型



産官学連携本部・学術研究支援室 (KURA) ・関西TLO・京都イノベーションキャピタル等、が連携して実施

BayerやBASFといった海外企業、日立製作所、パナソニック、ダイキン等の日本大手企業とも、課題探索のフェーズから包括連携による組織対組織のアライアンスを構築

産学連携による新たな協創の場づくりを目指す

iCAP投資案件

株式会社AFIテクノロジー (AFI)
 株式会社京都創薬研究所 (KDDD)
 株式会社幹細胞&デバイス研究所 (SCAD)

20170501



事業の紹介

担当: 伊藤URA

学内の知の集約と連携を図る学術研究支援室 (KURA) と学内外の産学連携を橋渡しする産官学連携本部、京都イノベーションキャピタル、関西 TLO等が協力し、自然科学から人文社会までの幅広い分野において、

課題探索フェーズから協働する組織的な産学共同研究を推進・支援しています。さらに、次世代起業家の育成事業シーズのインキュベーション支援等を通じて、京都大学におけるイノベーション・エコシステムの構築を目指します。

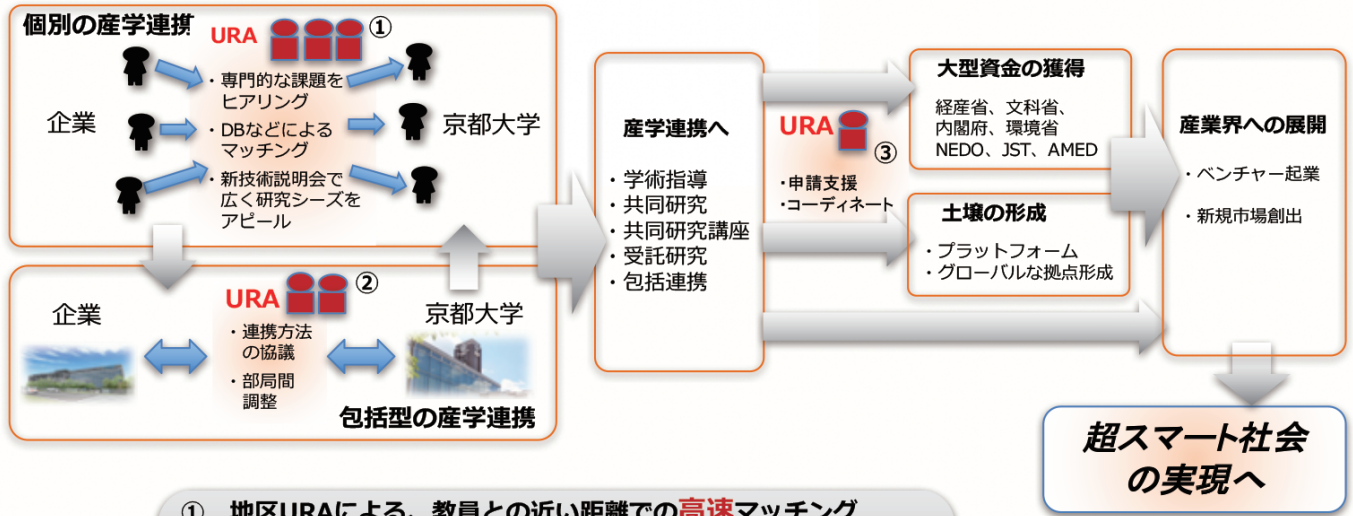
B URA制度整備 (Bメニュー)

イノベーション創出への地区URAの活動

人際 / 産学連携

【課題】 産学連携の活性化によるイノベーション創出が求められている。

【目的】 企業ニーズと研究シーズの最適マッチングで、「超スマート社会」実現へ。



- ① 地区URAによる、教員との近い距離での**高速**マッチング
- ① 企業の**技術シーズ**を大学の研究へマッチング
- ① データベース活用による、**高精度**マッチング
- ② 新規テーマ創出に向けた、**包括型連携**の協議
- ①+③ 企業とのマッチング、申請支援により、**AMED事業採択**

20170501

This block features a collage of URA event posters and testimonials. The posters include:

- 京都大学 テックコネクト** (TechConnect) events, such as the 2016/9/9 event (15:00~17:00) and the 2017/3/10 event (15:00~17:00).
- 新技術説明会 (テックコネクト) を年2回開催** (TechConnect technology seminars held twice a year).
- 共同研究テーマ探索のための教員紹介** (Faculty introduction for joint research theme exploration).
- 企業とのマッチング+公募の申請支援** (Matching with companies + open application support), including AMED funding for medical/hospital areas.
- 企業の研究所内 (企業主催) での研究事例紹介** (Research case introduction in company R&D centers).

 Testimonials from both companies and faculty members are included:

- 参加企業の声** (Company voice): 「当社の技術が役に立つかもしれません。一度、面談を希望します。」 (Our technology might be useful. We would like a meeting.)
- 教員の声** (Faculty voice): 「よい仲人さんのおかげで共同研究がはじまります。」 (Thanks to a good mediator, joint research begins.)
- 企業の声** (Company voice): 「弊社の保有している○○、○○の技術を、この分野の進歩のためにも応用していきたいと考えております。」 (We have technologies ○○, ○○ and want to apply them to progress in this field.)
- 企業の声** (Company voice): 「まずは、弊社提案のテーマにつきまして連携の可能性に関してのご相談をさせていただきたいと考えております。」 (First, we would like to consult on the possibility of collaboration regarding our proposed theme.)
- 企業の声** (Company voice): 「今後組織的または個別にいろいろな動きが出てくると思いますので、引き続きよろしくお願ひ申し上げます。」 (We expect various movements in the future, so we continue to request your support.)

20170501

次世代研究者育成プログラム

人際

- 目的**
- 学内外組織と連携し、個別の研究室事情や就学就職といった生活環境の変化など、判断の多かった研究者の若手ステージをひと繋がりして定義します。
 - アカデミア研究者に限らず、研究の未来を協力して支える人材を増やすためのプログラムや環境機会を提供します。

方法

1. 研究者人生スタート直前と直後を繋ぐ

- 若手研究者の**共助グループ**をつくり、研究者人生スタート前の若手とスタート後の若手を繋ぐ。
- ディスカッションの場から若手研究ステージに必要な情報や支援を汲み取る。

2. 若手研究ステージに必要な研究環境を形成支援

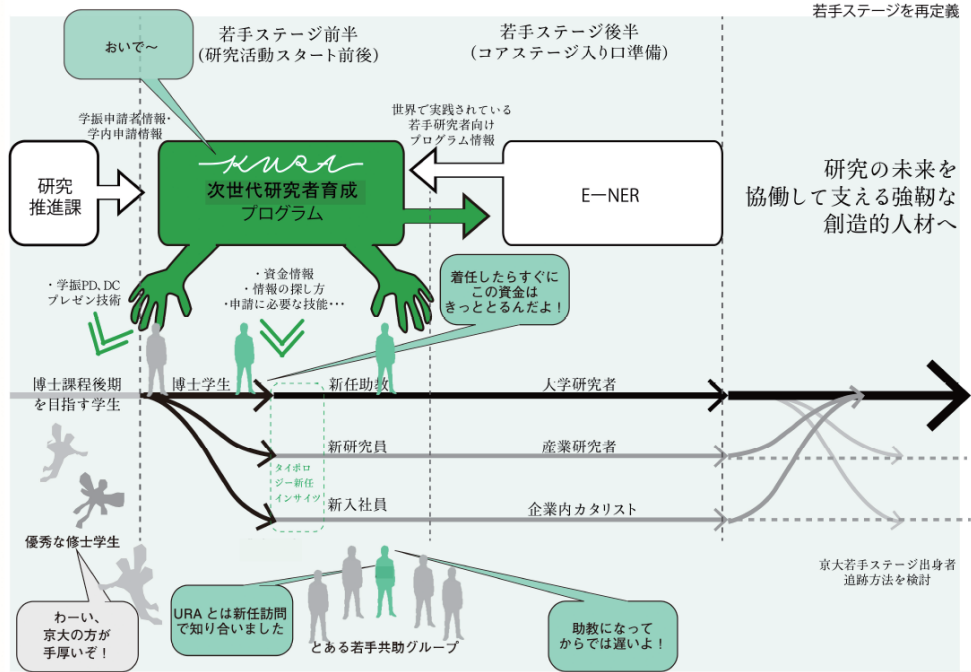
- 新任研究者インタビューから大凡の課題を抽出する。
- 次世代研究創成ユニット**と若手のカリキュラムに関する情報と連携を行い、ニーズにあったプログラムを設計する。

3. ステージ卒業後の追跡を可能にする

- 若手研究ステージで支援した学生がその後どのようなキャリアを積むのか、流動を把握する仕組みづくりを視野におく。京大大学事務本部と連携する。

4. 優秀な博士人材の呼び水となる

- 京大の研究環境が比較的恵まれていることは学外から来た研究者の知るところ。京大を志望する前に研究環境の良さをアピールする。
- 着任時に取り逃がしがちな学内資金、学外資金情報のアタッチとしての機能を担う。



20170501

プログラムの紹介

担当: 仲野 URA

研究者としてのキャリアをスタートする直前・直後の研究ステージは学生から研究者への移行期ですが、連続するステージとして扱われていません。また、研究科や指導教官によって何が伝授されて何が伝授されないのかは、ブラックボックス状態です。その結果、研

究者として着任する頃にはすでに、研究者スキルに差がついている可能性があります。研究者への移行期は、その後の長い研究活動の基盤・基礎体力をつける上で大切な期間です。このステージにフォーカスした支援・育成が、日本全体の研究の未来をたくましくする、と考えます。このプログラムでは、アカデミア研究者のみならず民間の研究者や企業などにおいて研究とのかタリストとなる人材の育成も視野に入れています。

B URA制度整備 (Bメニュー)

人文・社会科学系研究支援プログラム

国際 / 学際 / 人際

【人社系の課題】

【基盤的要因】

【課題解決に向けた取り組み】

【担当URA】

京大人社系の研究力（実績、価値、蓄積資源）をより広くアピールする必要がある
各分野の特徴を反映し、研究力を分かりやすく伝えるための環境と方法の整備が必要
学内の人社系の研究環境の改善 および 人社系の研究力の可視化 に取り組む
13名（人社系担当+ICT担当+国際系担当）+ 他大学のURA組織との連携

3つのアプローチ

① URAをハブとした組織間連携による研究基盤整備

② 個別研究者・部局に対するプレ&ポストアワード支援

- ・ファンド情報提供・説明会開催
- ・プロジェクト申請支援
- ・プロジェクト運営支援
- ・シンポジウム・国際会議等開催支援
- ・イベント開催支援
- ・英語（外国人）研究者支援

③ 学外・国外機関との連携

- ・人社系に特化した研究支援者ネットワークの構築と情報交換
- ・海外機関の研究支援者との連携（国際シンポ支援、MOU締結支援など）
- ・海外拠点（ASEAN・欧州・アフリカ^[注]）を通じた研究者ネットワーク構築
- ・事務部の海外（英語）対応支援

3つの重点取組

資源整備・成果発信プロジェクト

学内の研究資源と研究成果を広く発信するために

- ・学内資源の保存&連携&利活用のプラットフォーム構築支援
- ・研究成果発信の新しいビジネスモデル構築に向けた情報収集（出版、翻訳助成など）
- ・新刊図書紹介SNSの構築 など

外部資金獲得プロジェクト

研究のスケールアップを目指す研究者のために

- ・公募型資金情報サイト「鎗」の充実と代行登録
- ・人社系ファンドの学内説明会開催
- ・大型、国際、学際、社会課題解決型のチーム形成支援 など

研究力の可視化プロジェクト

数値で表せない人社系の実績を伝えるために

- ・京大版研究実績レポートのフォーマット検討・作成
- ・定量・定性データ等を用いた分野貢献度の指標検討など

京都大学の人社系研究支援モデルの提示をととした
日本の人社系分野の国内外プレゼンス向上への貢献 20170501

人社担当URAによるJSPS科研費申請支援(H26-28)

◆ JSPS 課題設定による先導的人文・社会科学系研究推進事業
◆ JSPS 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム RISTEX
◆ JST さくらサイエンスプラン
◆ 他、民間財団助成金支援、学内ファンド各プログラムなど多数

人社系の多様な研究資源や成果出版物の国内外広報
— 書籍、論文、翻訳、翻刻、目録、教科書、判例解説、映像資源など —

シンポ・国際会議等開催支援実績

- ◆ PNC/じんもんこん2013
- ◆ 第8回世界アフリカ言語学会議2015
- ◆ 日本デジタル・ヒューマンティーズ学会2015
- ◆ 京都大学生命倫理国際シンポジウム @ブリストル大学 etc.

イベント開催支援実績

- ◆ 「スーチャーさんと京都」講演会
- ◆ 「ビジュアルコミュニケーションプロジェクト」上映会
- ◆ 「京都大学アカデミックデイ」

世界的に卓越した知の創造の組織・国を超えた共有と協働をサポート

人社系研究担当URAによる個別ニーズに応じた支援

人社系分野の助成財団POを招き学内説明会を開催

人社系の特徴を反映した研究力の可視化に向けて

「人文・社会科学系研究推進フォーラム」の企画・開催

- ・2014年度 第1回「人文・社会科学系研究推進に必要な共通基盤整備を考えよう」@大阪大学（大阪大学・京都大学・筑波大学、2014年12月）
- ・2015年度 第2回「人文・社会科学系支援の三手先を考える」@つくば国際会議場（筑波大学、大阪大学、京都大学、早稲田大学）

URAシンポジウム、RA研究会、RA協議会における人文・社会科学系セッションの企画、発表

- ・「人社系支援のあり方」第5回RA研究会セッション（京都大学・大阪大学・東京大学、2013年11月）
- ・「人社系分野への研究支援と研究評価 ～グッドプラクティスを探る～」第6回RA研究会セッション（京都大学・筑波大学・大阪大学、2014年9月）
- ・「人社系の研究力ってどうはかるの？」RA協議会第1回年次大会セッション（筑波大学・大阪大学・京都大学、2015年9月）

20170501

プログラムの紹介

担当: 神谷URA

日本の大学は、人文社会系の研究力や評価の向上に関して、組織的なバックアップに積極的ではなく、人社系研究は実績に見合った評

価を得られていないのが実情です。「人文・社会科学系研究支援プログラム」では、人社系研究を巡る課題解決に向けて、(1) 資源整備・成果発信、(2) 研究力の可視化、(3) 外部資金獲得を柱とし、全学的に展開する研究環境の整備事業と、個別 URA によるマンツーマン対応とを併せた支援に取り組んでいます。

KURA HOUR - 研究支援のアンテナショップ -

人際 / 機会提供

【課題】 URAの認知度が低い

【目的】 アクセスしやすい図書館のラーニング・コモンズで活動し「顔の見える存在」に！

When	Where	Who	How	Whom
毎週月曜日、 	図書館1階のラーニング・コモンズで、 	URAなど研究支援スタッフが レクチャーやワークショップ。 	研究者は・・・ 	
いつもの時間にいつもの場所で開催することで、 URAや研究支援スタッフの存在を身近に！		研究者から直接フィードバックが得られる！ 講師となるにあたって、 知識やスキルをあらためて 体系化できる！		研究支援のプロに 出会える！ スキルが学べる！ 気づきが得られる！
And more! 		学内連携が広がる！ 学内の頼れる人材を アピール！		今後は、すでに定着してきた “KURA HOUR”をさまざまな 場所へ展開していく

KURA HOURは附属図書館と共催。広報担当スタッフや大学院生ともコラボ

20170501



今までのKURA HOURと参加者数

平成26年度 4回	センス要らずの伝わる研究発表スライド作り など 計107名
平成27年度 5回	論文投稿の前に知りたいオープンアクセス など 計106名
平成28年度 12回	成果発信シリーズ ・ マスメディアを使って研究を伝える方法 16名 ・ ウェブと研究者のつきあいかた 14名 ・ 研究をアピールするためのSNS活用術 17名 ・ 専門外の人に研究を伝える方法 12名 ・ 伝わる研究ポスター作成術 22名 外部資金獲得シリーズ ・ まだ間に合う！今年の科研費申請 23名 ・ 民間助成団体助成金のススメ 20名 ・ クラウドファンディングのススメ 33名 次世代研究者支援 Transferrable skillsワークショップ (4回) のべ41名

受講者アンケート結果 平成28年度

- 期待どおり！・・・約85%
- 知人に薦めたい！・・・約85%
- 研究に役立つ！・・・約88%
- 具体例が多くてわかりやすい説明でした。
- ワークショップの参考になった。

20170501

KURA HOURの紹介

担当:天野 URA

誰もが訪れやすい図書館のラーニング・コモンズで、定期的にKURAや他の研究支援スタッフが研究者向けに研究力強化につながるワークショップ等を開催しています。KURA HOURの場は「研究支

援のアンテナショップ」であると捉え、URAを始めとする研究支援スタッフを「顔の見える」身近な存在としてアピールし、支援体制や支援プログラムの認知度アップを目指しています。また、講師のスキルアップや、学内の研究支援組織間の連携にもつながるよう工夫しています。

B URA制度整備 (Bメニュー)

タイポロジー・プロジェクト

基盤整備

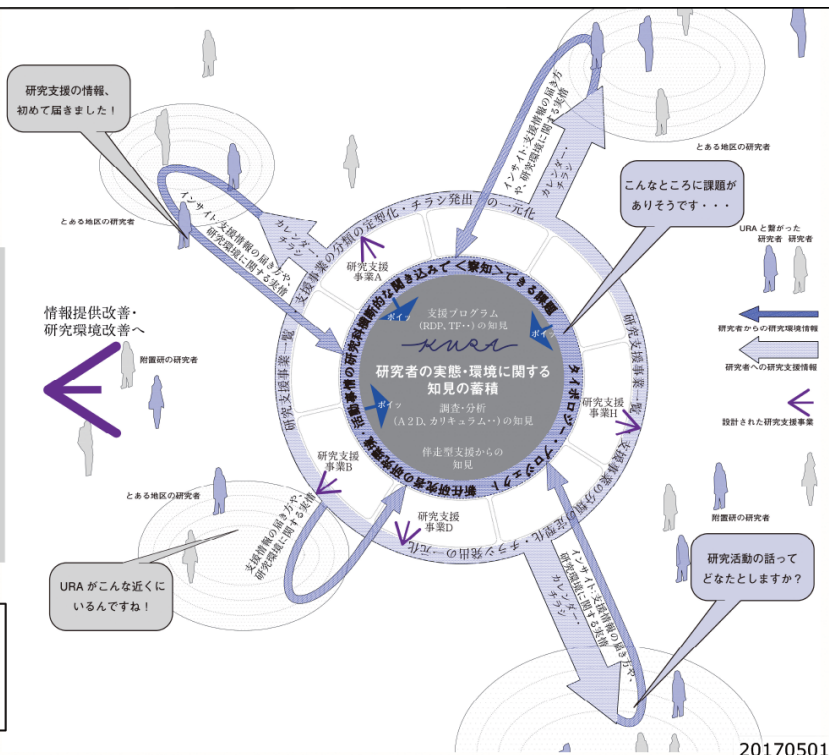
目的

- 研究支援サービスを研究者が最大限に活用できるよう、これまでの情報伝達手段を**研究者視点**で見直す
- サービスの受け取り手である研究者の**インサイト**を**対面で収集**・分析し、支援サービスの改善につなげる

方法

- | | |
|---|---|
| <p>1. 研究支援情報を適切に届けるため</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 京都大学本部事務と連携して研究支援情報を集約 ○ 集約した情報を支援内容と研究のフェーズごとに分類 ○ 分類した研究支援情報を網羅したカレンダーを作成 ○ カレンダーと連動した支援情報のチラシを作成して配布 | <p>2. 支援事業の改善につなげるため</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 環境が不安定な新任研究者を重点的に訪問し、インタビューを実施 ○ インタビューから研究環境に関するインサイトを収集 ○ これらの情報を整理・分析し、事業担当者に共有。研究支援サービスに反映させる |
|---|---|

以上2つの活動を両輪として回し、京大研究者の**研究環境に関する知見を蓄積**
↓
支援サービスの継続的な改善に役立てる



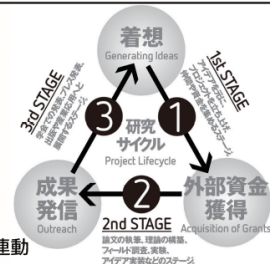
20170501

情報の伝わり方の質を高める工夫ー

- 支援内容による分類 x 研究ステージの分類
研究者がすぐに分かる言葉を実際に調査 → 研究ステージと研究支援内容を組み合わせて情報発信

<p>外部資金獲得支援 Academic Support for Grant Proposals 採択可能性向上のための情報提供、提案書レビュー等の獲得支援を行います。</p>	<p>学内ファンド提供 Grants at Kyoto University 京大研究者限定の、研究活動状況に応じた使いやすいファンドの提供です。</p>
<p>出展者募集 Call for Presentations 研究発表の機会を様々な形式でご用意し、出展募集します。</p>	<p>イベント案内 Events and Seminars 研究活動に役立つ情報やスキル伝達や仲間づくりの機会をご用意します。</p>

X



- チラシ (研究支援情報) ・ カレンダー (研究支援情報一覧) ・ Web (情報の詳細と更新情報) の連動

2016年度の新任研究者ヒアリングを受けー

515人の新任研究者に研究支援情報一覧を配布。
研究室を訪問、研究に必要な情報の届き方や研究環境についてヒアリングを実施。
ヒアリングから得た示唆に基づき、本年度の**学内ファンド【いしずえ】の申請条件改定** 並びに、**若手研究者スタートアップ研究費**の告知時期の改善、**研究活動スタート支援申請支援の開始**。

新任研究者訪問からの声ー

<p>カレンダー (研究支援情報一覧) は来年もつってください!</p>	<p>学内ファンド公募の締め切りを、研究者の実情に即したものにしたい</p>	<p>他の研究者と話す機会がないので、自分の置かれている環境が当たり前だと思っていた</p>	<p>自分の着任のタイミングでは、初年度で公募に間に合う資金がない</p>	<p>学内の案内が日本語ばかりでよく分からない (外国人研究者)</p>
--------------------------------------	--	--	---------------------------------------	--------------------------------------

20170501

プロジェクトの紹介

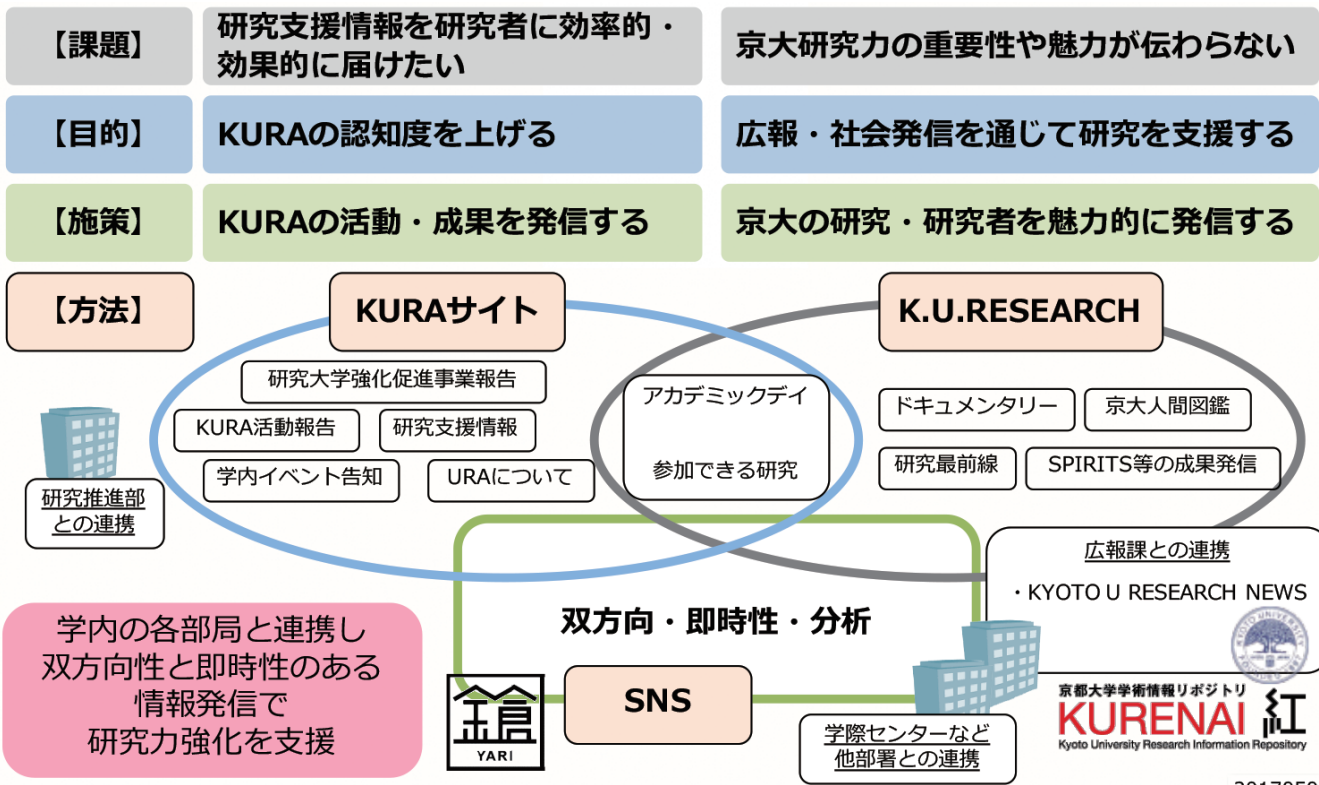
担当: 仲野 URA

学術研究支援室 (KURA) は様々な研究支援サービスを設計、運営しています。このサービスの価値を最大化するためにも、研究支援情報を対象者に適切に届けることが重要な責務となっています。そのため、

情報伝達の達成度を評価することが、サービス設計の改善検討に繋がります。そこで、3000人を超える京都大学の研究者に対してどういった支援が最適なのかを、日々検討しています。本プロジェクトは、「支援情報」を媒体とし、「研究者目線」を合言葉に、様々な専門分野の研究者と横断的に向き合いながら、支援事業改善の糸口を探ります。

学術研究支援室 (KURA) のWEB サイト + SNS 運営

機会提供 / 基盤整備 / 広報



20170501

KURAサイト

- 「研究支援情報」 タイポロジーを採用した分類で分かりやすく研究支援情報を提供
- 「イベント案内」 KURA主催のイベントを告知し、SNSで効果的に集客
- 「KURAメンバー紹介」 多才で多様な全URAのプロフィールをを写真付きで紹介
- 「科研費ポータル」 科研費申請に関する情報のポータル機能
- 「活動実績について」 研究大学強化促進事業などKURAの具体的な活動成果を公開

K.U.RESEARCH :

- 「研究最前線」 京大の最新研究を掲載。20~30本/月
- 「ドキュメンタリー」 京大の研究やプロジェクトを分かりやすく解説。年間5~6本を掲載
- 「京大人間図鑑」 京大の研究者や研究支援者を魅力的に紹介。年間8~10人を紹介
- 「アカデミックデイ」 出展研究を個別に紹介。全コンテンツをリポジトリに登録
- 「参加できる研究」 年間約10件の学際研究プロジェクトを紹介

SNS

- 「Facebook」 www.facebook.com/k.u.research/ www.facebook.com/kuraoffice/
- 「Twitter」 @kura_office、@KyodaiAcaDay

人社系研究の支援に注力した「京大新刊情報ポータル」 京大の研究者の新刊情報を発信
<http://pubs.research.kyoto-u.ac.jp/> Twitter : @KyotoU_pubs

20170501

B URA制度整備 (Bメニュー)

国民との科学・技術対話活動支援

人際 / 学際

【目的】 京都大学に、研究者が「国民との科学・技術対話」の本質を捉えた活動ができる環境を作り、社会の中での研究活動の推進を円滑にする

【背景①】 国民との科学・技術対話とは

2008年内閣府より『「国民との科学・技術対話」の推進について』が交付されました。取り組むべき事項として公的研究資金を受けている研究者は『(研究者) 自らが国民に対して研究を説明する』ことが掲げられています (<http://www8.cao.go.jp/cstp/stsonota/taiwa/>)。この活動に対する研究者への負担の軽減のための支援と、研究を巡る対話に向けた本質を追求すべく、京都大学では「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ (以下:対話WG) を始動させました。

【背景②】 研究者の認識との乖離

2011年京都大学の対話WGでは学内の1942人の研究者に対して「国民との科学・技術対話」についてのアンケートを実施しました。その結果、「国民との科学・技術対話」で言及されている活動と研究者の認識に乖離があることがわかりました。「国民との科学・技術対話」に相当する活動の有無について、尋ねたところ2/3の研究者 (660人回答) が「実施したことがある」と回答。しかし、その具体的な内容は「講演」「授業」といった一方通行の解説という結果でした。

【手段】 専門外の人との本質的な「対話」を促す場「京都大学アカデミックデイ」を提供

アカデミックデイMTG (教員・URA・職員) キックオフ

アカデミックデイは**研究者 (教員) とURAと事務職員の三者**が渾然一体となって企画するのが特徴。URAが三者を繋ぎます。

全出席研究者の情報・写真を掲載。各参加研究者は自身の**研究プロジェクトの活動報告書**の作成に、この報告書を利用

参加研究者・来場者アンケートの結果も報告書に残し、**活動のノウハウを蓄積**

来場者アンケートはノベルティと交換で脅威の回収率!

参加者・登壇者に京都大学アカデミックデイ報告書配布

研究とURAの支援を発信するサイト K.U.Researchと連携開始

ポスター・チラシの他、ソーシャルメディアを利用した広報を展開
※K.U.Researchは「未到領域に挑戦する」研究者を紹介するKURAが運営するサイト (<http://research.kyoto-u.ac.jp>)

出席研究者公募 (出席高校公募)

参加研究者は公募で募集!
※高校生出席の場合も案件用意
アカデミックデイでの研究紹介は京都大学外にも開いています

出席研究者に向けた、対話のためのヒントの説明会開催

「国民との科学・技術対話」の主旨の説明の他、**非専門家に向けた研究紹介・対話方法をレクチャー**。対話を促進させるコンテンツ作成の相談も受け付け。

研究者の精神的・努力的負担軽減の他、対話技術を身につけてもらうために実施

「研究者が専門外の人と対話をする」 URAによる工夫と支援

対話の場をデザインし準備することで100名以上の研究者の対話活動を支援

今まで持っていなかった学外の機能・ノウハウを大学に取り入れる
学内と学外を円滑に繋ぐ役割を果たすこともURAの特徴

Win-Winになるコラボレーションから、アカデミックデイの広報を展開。同時にアカデミックデイでの知を拡散。

外部業者 (クリエイティブ・エイジェンシー) とも共同。議論をしながら企画の発展を計画

京大附属図書館や京大生協でも「研究者の本棚」を設置

外部業者と協力して、当日のレポート作成・拡散を検討

20170501

支援の3本柱:

- ・ 対話の場の提供 (京都大学アカデミックデイ)
- ・ 非専門家に向けた対話方法のレクチャー
- ・ 活動成果の蓄積と発信

研究者の声:

※2017年度アカデミックデイ参加研究者アンケートより

Q. 専門外の人と話すことで、研究の意味や目的をあらためて考えるようになった.....Yes 90% / No 2%

Q. 自分の研究と人々の生活との関わりを意識するようになった.....Yes 71% / No 5%

Q. 研究内容を専門外の人に説明する訓練となった.....Yes 99% / No 0%

Q. 他の研究者との交流の機会になった.....Yes 88% / No 1%

Q. 他の研究グループから、今後の研究方針に関する示唆を得ることができた.....Yes 41% / No 22%

- ・ 聞きに来てくれた人たちの興味や説明に対する反応を感じられて、とても参考になった。(理工学系)
- ・ とても興味深く聞いてくれるので、話すこと自体楽しいですし、日頃の自分たちの研究の意義を再確認できました。(医薬生命科学系)
- ・ 事前に説明会をしていただけたため、準備をする際に参考になった。(人文科学系)
- ・ こんな様々なテーマを研究なさっている先生方がいらっしゃるのか、と京都大学の懐の深さを感じました。(理工学系)
- ・ 次のプロジェクトでやろうと思っていた課題点を一般来場者に指摘されたときにはビックリした。重要なことというのはそういうことなのかと。(医薬生命科学系)
- ・ 学内の多くの方とお話しする機会は少ないので、学内関係者の知っている研究を知り、ディスカッションをする機会があるということは充実していると思います。(人文科学系)

「京都大学アカデミックデイ」 ※ 毎年度開催

平均参加研究者数 約200名/年

平均来場者数 約450名/年

対話活動に参加した研究・研究者情報

- ・ K.U.Research で公開 (リンク) → (<http://research.kyoto-u.ac.jp/gr/>)

対話活動で使用した全てのポスター資料

- ・ 京都大学学術情報リポジトリ「紅」登録・公開 (<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/>)

20170501

担当: 白井URA

宇治地区DNAシーケンスコア

基盤整備

【目的】 基盤的な共通機器サービスをパイロット的に実施し、研究大学強化促進事業実施項目1-(3) 京都大学・汎用機器オープンファシリティーコア構想に向けた課題抽出を行う。

【対象】

DNAシーケンスを研究で実施している研究者。共通機器の管理を行っており業務が煩雑化している研究者。

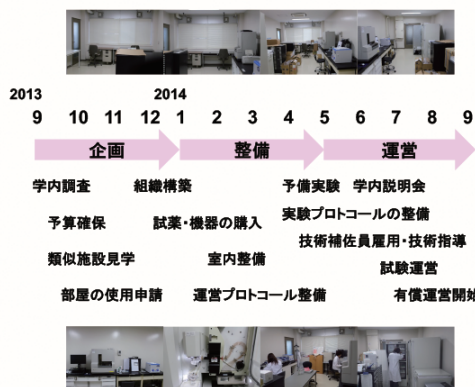
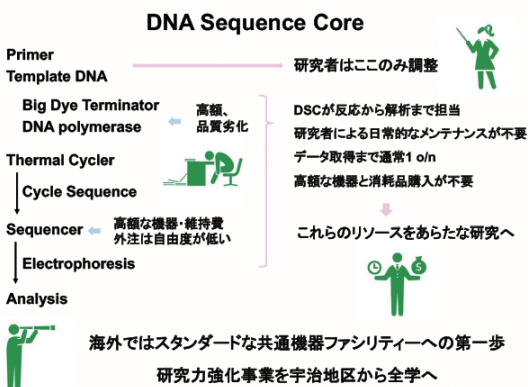
【手段】

京都大学の宇治地区にて共通機器施設としてのDNA配列解析施設の企画、設置、運営を支援

【効果】

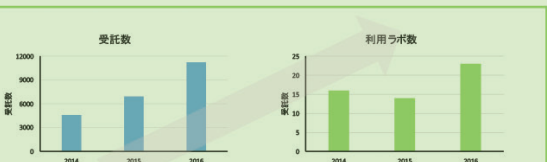
- ・研究者が、迅速かつ安価な学内サービスを受用できる。
- ・部局を超えた学内共通機器施設運営のノウハウが蓄積でき、全学的な共通機器施設へ向けた課題抽出が可能となる。

URAが事業整備・運営を支援



20170501

宇治シーケンス実施研究者の9割が使用



**H28より吉田・桂地区からも受託を開始
受託数、利用ラボ数が大幅に増加**

利用者から共通機器に対する課題も抽出

- 汎用機器
- ・せめてどこに共通機器があるかのリストがない。
 - ・専属オペレーターがついた汎用機器に学内受託できる体制が理想。
 - ・アミ酸分析の学内受託を担っているが、施設を維持するのが厳しい。
 - ・使っていないシーケンサーを譲渡するので有効活用してほしい。
 - ・大型プロジェクトの終了で機器があふれるので、用途を考えてほしい。
- 研究者に共通施設の運営ノウハウも提供
- Practice
- ・MRI装置の受託受入れを検討している。課金システム構築について教えてほしい。
 - ・共通機器室のために規定を参考にしたい。

研究者から『学内に受託できる安心感』に
高い評価の声

学内他地区からもサンプルを受託
研究力の強化に貢献



20170501

事業の紹介

担当: 田上 URA

DNA塩基配列解析の受託施設として京都大学の研究者に解析データを提供する宇治地区DNAシーケンスコアは、研究の効率化と研究費の有効利用を目指した事業です。

部局横断型の共用機器施設におけるパイロットケースの一つとして、運営ノウハウの蓄積を目的に、学術研究支援室 (KURA) が運営を支援しています。

京都大学学術研究支援室 (KURA)
KURA の活動紹介

発行日 2017 年 5 月

制作・発行 京都大学学術研究支援室 (KURA)
〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
<http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/>

デザイン 株式会社おいかぜ

※京都大学学術研究支援室 (KURA) の活動は、
文部科学省による研究大学強化促進事業の支援を受けています。

